



岩手県気仙地方における里山文化について

目次

はじめに

| | |
|----------------|----|
| 1 調査研究の背景 | 01 |
| 2 調査研究の目的 | 02 |
| 3 調査研究の対象地域と視点 | 02 |

| | |
|--------------------|----|
| I 気仙地方の里山と人間とのつながり | 03 |
|--------------------|----|

II 気仙地方の概要

| | |
|-----------|----|
| 1 位置と地形 | 05 |
| 2 歴史 | 06 |
| 3 自然と土地利用 | 07 |

| | |
|------------------------|----|
| III 気仙地方における生活の営みと里山文化 | 09 |
|------------------------|----|

| | |
|----------------|----|
| 1 気仙地方の山、里、海 | 11 |
| 2 山の営みと技 | 13 |
| 3 里の営みと自然 | 15 |
| 4 海の営みと文化 | 17 |
| 5 集落の組織力 | 19 |
| 6 里山と新しい酒蔵 | 21 |
| 7 里地と新しい風景 | 23 |
| 8 里海と新しいコミュニティ | 25 |
| 9 広がる花づくり活動の輪 | 27 |

IV 崎浜を事例とした里山文化の継承に向けて

| | |
|-------------------------|----|
| 1 崎浜地区の概要 | 29 |
| 2 崎浜地区の「里山文化」の特徴 | 33 |
| 3 崎浜地区における「里山文化」の継承に向けて | 36 |

| | |
|------------------------------|----|
| V 被災地における復興への対応—崎浜地区復興会議の活動— | 37 |
|------------------------------|----|

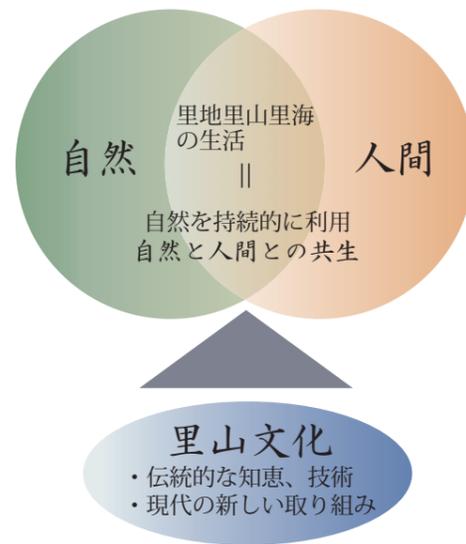
はじめに

1. 調査研究の背景

－「里山」とは

里山は人が自然を利用し、自然も人に利用されることによって、豊かな生態系を保ち、自然と人間との共生によってその価値が維持されてきた。また、その土地の文化、民俗は自然と人間との関わりの中で形成されていった。本調査研究では、農地、集落などを含む里地、居住地の背後の森林である里山、海の恵みをもたらす里海を含むフィールドを広義の「里山」と位置付ける。

また、本協会の理念である「自然と人間との共生」という観点から、古くから人と自然と一緒に暮らしてきた里地、里山、里海を対象に、地域特有の伝統的な知恵・技術ならびに現代の新しい取り組みを「里山文化」と捉える。



－「里山」に関するこれまでの取り組み

本協会は、「自然と人間との共生」という基本理念の継承・発展を目的とし、自然と共生する豊かな生活文化が形成されてきた里山をテーマに、2009年度（平成21年度）より全国に展開する里山での活動事例について調査を行ってきた。さらに、その成果を、①「里山」に関する「自然との共生」のメッセージの発信、②山、里、川、海、都市等様々なフィールドの取組支援、③里山再生などに取り組む人たちのネットワークづくり、の3点を本協会の今後の取り組みの主な方向性としてとりまとめた。

－東日本大震災の復興支援に関するこれまでの取り組み

平成23年度から東日本大震災被災地への「花とみどりの復興活動支援事業」として、花壇やプランター等の整備、屋内を飾る切り花や寄せ植えの栽培指導等、多様な活動を行う団体への助成事業を本協会では行ってきた。この事業は一定の成果を挙げ、平成25年度に終了する。一方で、震災後2年以上経ったが沿岸部を中心に被災地の復興は道半ばであることから、今後も継続的な復興支援の取組が必要と考える。



2. 調査研究の目的 —復興過程における「自然と人間との共生」—

－文化的資産としての里地、里山、里海の継承

東日本大震災の被災地域において、特に被害の大きかった地域は沿岸部の里地、里山、里海地域である。これらの地域の復興と自然を再生させていくことは大きな課題であり、被災地の物的な復興だけでなく里地、里山、里海のもつ文化的な側面の継承が重要である。さらに、里地、里山、里海の自然がいかに生活と密接に関わっているかを情報発信することにより、被災地の物的な復興に加え、「里山文化」の保存・継承を通じて、精神面、文化面の復興につながる一助となるよう必要な調査を行う。

3. 調査研究の対象地域と視点

－対象地域

本調査研究では、これまでの本協会の復興支援の取り組みや活動団体などとの連携を踏まえたうえでリアス式海岸の繊細で美しい自然環境のなかで地域独自の文化を形成し、山と里と海の結びつきが強い岩手県気仙地方のうち、大船渡市、陸前高田市沿岸域を対象とした。なお、詳細調査のモデル地区として大船渡市崎浜地区を対象とした。

－調査研究の視点

近年、全国各地で、「里山」を舞台とした地域活動が活発に見られる。これらは、地域の絆やコミュニティを維持していく上で大きな役割を果たし、「里山活動の新たな芽生え」と捉えることができる。そこで、本調査研究では「里山」における人と人とのつながり、里地、里山、里海の空間のつながりを切り口とする。さらに、新旧の「里山文化」を考察することにより、被災地の復興につなげると共に、今後の「里山文化」の果たすべき役割について検証するものとする。

東日本大震災による自然の猛威

里山に関する文化面から捉えた被災地の課題

- ・コミュニティの分断
- ・生活文化に関わる各種資源の流出
- ・「里山文化」の担い手の減少

- ・被災地におけるネットワーク構築のバックアップ
- ・被災地域における生活、文化等を見直すきっかけづくり
- ・「里山文化」の情報発信



I 気仙地方の里山と人間とのつながり

1. 岩手県の里山利用

岩手県では、自然植生とそれに近い植生は、あわせて14%が残るのみで、主に奥羽山脈や早池峰山などの高山の一部に限られている。^{*2}その他は代償植生で占められ、2%の市街地を除くと、残りの約84%は、いわゆる里山の構成要素によって広く覆われている。^{*2}

岩手県の里山は馬産地、木炭の産地として知られていた。馬産は江戸時代以前から行われ、良質な「南部馬」を産出していた。その頃の名残が滝沢市で行われている「チャグチャグ馬コ」という伝統行事、「南部曲がり家」と呼ばれる人と馬が一つ屋根の下で暮らす家屋があったこと、中世の牧野が「一戸」などの「戸」として、現在も市町村の名前として残っていることなどから窺うことができる。その他、三陸沿岸沿いに広がる北上山地の高原においても牧野が設置され、馬産が盛んに行われていた。現在ではそれらの牧野は畜産業に利用されている。また最近では風力発電の重要な立地として捉えられ、釜石市から遠野市にかけて、約40機の風車が設置されている。生物の生息域から見ると、北上山地の牧野は天然記念物であるイヌワシの餌場としても利用され、また一部の牧野で家畜によって維持される二次草地（シバ草地）はオキナグサなどの希少な植物の生育地としても重要である。

岩手県の木炭生産は、特に明治末頃から盛んになった。これは東京への鉄道が1891（明治24）年に開通し、首都圏への木炭の供給が始まったからである。木炭は北上山地を中心に生産が盛んであったが、明治以前も三陸沿岸地域を中心に製塩や製鉄などの産業用に、生産が盛んだった地域もある。岩手県は現在でも日本一の木炭生産量を誇り、岩手県北部を中心に生産されている。木炭以外の里山利用では、生活材（家屋の材料など）やシイタケのほだ木、チップ材などがあり、日本の里山の利用放棄が指摘されて久しいが、岩手県では、里山利用が比較的盛んに行われているといえる。

※1 第5回自然環境保全基礎調査 植生調査報告書（1999年）

※2 自然環境保全基礎調査 植生調査情報提供 < <http://www.vegetation.jp/> >

※3 林野庁木炭関係資料による < <http://www.rinya.maff.go.jp/j/tokuyou/tokusan/megurujoukyou/pdf/3mokutan.pdf> >

2. 気仙地方のこれまでの里山と人とのつきあい方—旧版地形図の読み取りから

気仙地方における里山利用の様子を、約100年前の1913（大正2）年旧版地形図（綾里・盛・気仙沼）から読み取りながら、この当時の里山の利用について考察を試みる。

現在の里山の土地利用と最も異なる点が、当時の山地における荒地の多さである。陸前高田市では竹駒町の氷上山、小友町の箱根山など、大船渡市では綾里半島の綾里富士や吉浜の夏虫山、大窪山、立根町と越喜来の間の峠付近など、集落から離れたところを中心に荒地が見られる。当時の荒地として表現されているのは、採草地や放牧地であったススキやシバなどを中心とする草地である。採草地は家畜の飼料や茅葺き屋根の材料としてススキやハギ類が、放牧地は家畜の放牧によってシバがそれぞれ維持されてきた。夏虫山・大窪山は現在でも三陸牛放牧地として利用されている。また、放牧地では家畜に嫌われるツツジが残存することが知られ、これが現在、氷上山や夏虫山において美しいツツジ群落が見られる理由ではないかと考えられる。このように里山における草地が、気仙地方においては重要な景観であり、それは家畜によって形成されてきたことが窺える。

旧版地形図によれば、集落の近くには広葉樹林が広がり、尾根沿いに針葉樹林が散見され、現在のようにスギやマツの森林が多く見られるような景観ではなかったようだ。集落近くの広葉樹林は、いわゆる雑木林と呼ばれる農用林で、薪炭を得るために利用されていたと考えられる。また、尾根に見られる針葉樹林はアカマツ林であり、天然に生えてきたものが南部アカマツとして利用されていたと考えられる。一方で、スギなどの植林が増加するのは、戦後の拡大造林の頃からであることが一般的である。

◇チャグチャグ馬コ（滝沢市）



◇住田町中上団地の木造仮設住宅



3. 新しい時代の里山とのつきあい方

新しい時代の里山、つまり森林とのつきあい方として、森林認証制度を利用した先進的な取組が住田町で見られる。気仙地方の山間部に位置する住田町の森林は、FSC（Forest Stewardship Council）による森林認証制度を受けている。森林認証制度とは、環境保全に配慮し、地域社会の利益にかなない、経済的にも持続可能な形で行われているかを評価し、認証する制度である。この森林認証制度の国際的な認証機関がFSCであり、住田町の町有林・民有林の約12,000haの広い森林が対象になっている。

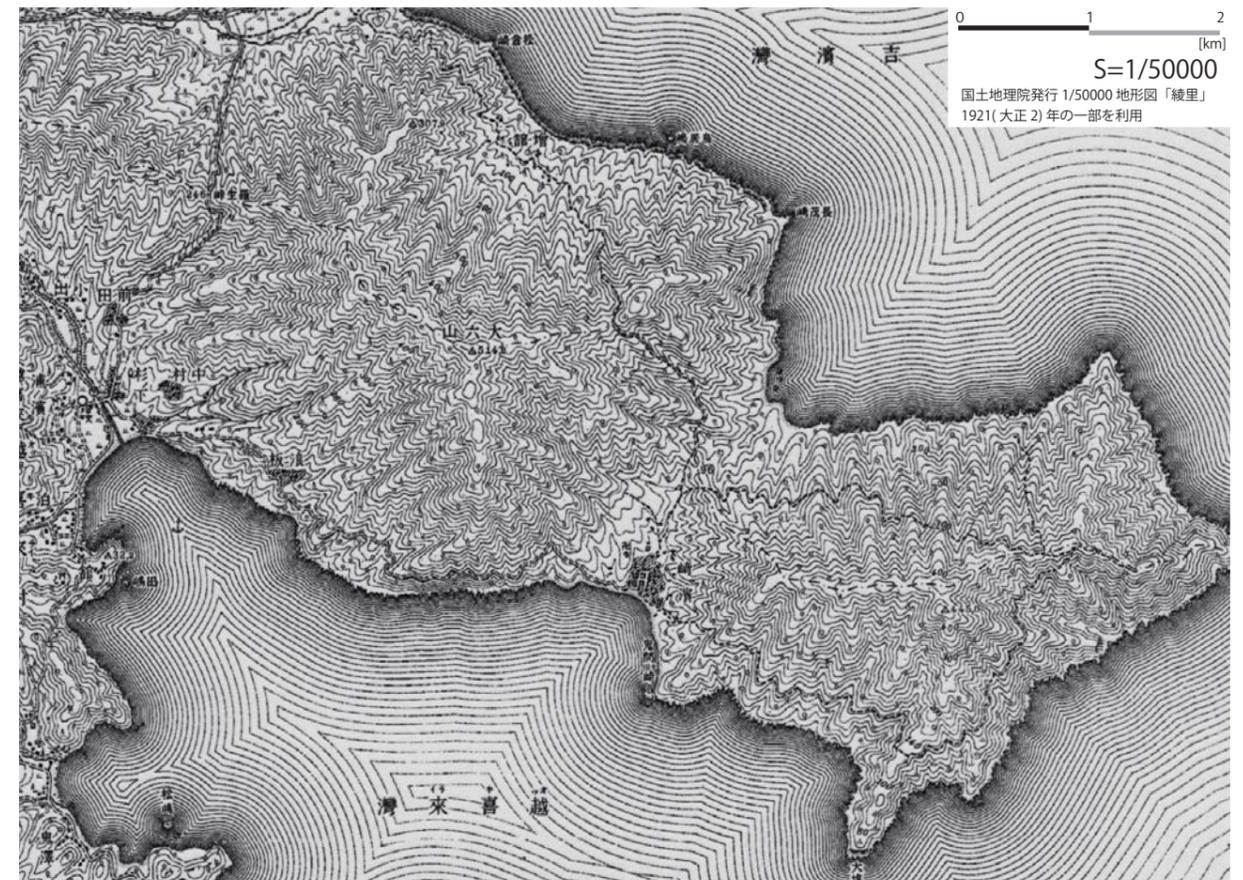
住田町のFSC認証は、森林の管理や木材の生産のみならず、その加工過程や建築まで一体となって行う体制を整え、それぞれの事業者もFSC認証を受けているのが特徴である。このような体制を取っていたことにより、住田町では東日本大震災の発生から約3ヵ月後に地元産の木材を利用した仮設住宅を約100戸建設することが可能となった。

被災地では、「森は海の恋人」を合い言葉に漁師による植林・森林整備活動（気仙沼市）や、薪を販売することで間伐を進めるプロジェクト（大槌町）など新たな里山とのつきあい方の萌芽も見られる。

今後も従来型の里山利用のみならず、このような新しい付加価値をつけながら、気仙地方の、ひいては被災地全体の里山の利用が盛んになっていくことを期待したい。

（岩手県立大学総合政策学部 准教授 島田直明）

◇大船渡市越喜来半島の大正時代の地形図



II 気仙地方の概要

1. 位置と地形

岩手県は15,480km²と、北海道に続く面積を持ち、南北に長い県土を有している。東部は北上山地が海岸線に沿って南北に走り、西部は奥羽山脈で秋田県との県境をなし、その間を南流する北上川に沿って、狭長な北上平野が発達している。北上山地は全体として紡錘形を呈し、西端は北流する馬淵川と南流する北上川で画され、東端は沈水海岸となって太平洋に没する。

また、岩手県は、東部に北上高地、西部に奥羽山脈が南北に縦走り、標高300m以上の山岳丘陵地帯が約80%を占めているが、宮古湾を境として海岸線に地形的差異がみられる。県北部の沿岸地域が切り立った海食崖が続く海岸線を有するのに対して、陸前高田市、大船渡市、住田町の二市一町で構成される気仙地方は岩手県南部に位置し、海岸線が屈曲に富み、数多くの湾入りと岬が連なるリアス式海岸が発達している。

リアスとは、スペイン語で「出入りの多い入り江」を意味するが、気仙地方海岸部は、広田湾、大野湾、大船渡湾、綾里湾、越喜来湾、吉浜湾を擁し、気仙川が広田湾に、盛川が大船渡湾に流入している。また、リアス式海岸特有の地形景観として、長い時間をかけて海水の浸食によってつくられた基石海岸の「穴通磯」や「乱曝谷」が特筆される。

その他、地質的には、秩父古生層を貫いて花崗岩が広い範囲に分布している。また、気仙地方の代表的な山岳として、氷上山(874m)、今出山(756m)、五葉山(1,351m)を数える。

◇東北地方行政区分図



出典「Craft MAP」< <http://www.craftmap.box-i.net/japan/line.php> >

◇リアス式海岸(越喜来湾)



◇五葉山



2. 歴史

気仙地方では400か所以上の縄文遺跡が発見されている。そのなかには蛸ノ浦貝塚など国指定の貝塚も含まれ、古い時代から人々の生活の跡が感じられる地域である。古代には、玉山、今出山、雪沢などの金山から産出された金は、東大寺大仏や平泉中尊寺金色堂にも使われたとされる。このほか、気仙地方の豊富な木材を筏に組んで川を下り、平泉まで運んだことも伝承として残されている。^{*1}

中世、鎌倉時代には、源頼朝の家臣である葛西清重の支配下にあった気仙地方は、藩政時代には伊達藩の直轄地となり、地方治制は村方役人である「大胆入」に任されたため、比較的自由的な社会生活が営まれていたとされる。^{*2}

明治以降の気仙地方の産業の特徴は、漁業、農業以外に、製塩、海苔養殖、製紙業などのほか、現在も気仙地方に残されている「気仙大工」と呼ばれる大工集団が特筆され、全国各地の神社仏閣、民家の建設、造船に関わった。^{*3}

*1 大船渡市史第6巻 巻通史編 86～92
*2 前掲書 289～293
*3 気仙大工の秀作 寺社建築と民家

■各地に残る史跡等
◇蛸ノ浦貝塚(大船渡市)



■今も残る気仙大工の仕事
◇普門寺三重の塔(陸前高田市)



◇長安寺山門(大船渡市)



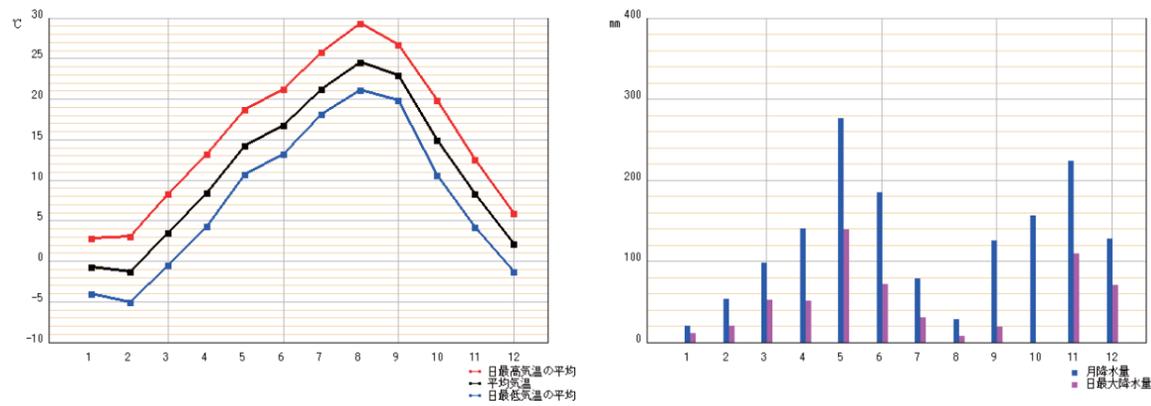
◇氷上神社(陸前高田市)



3. 自然と土地利用

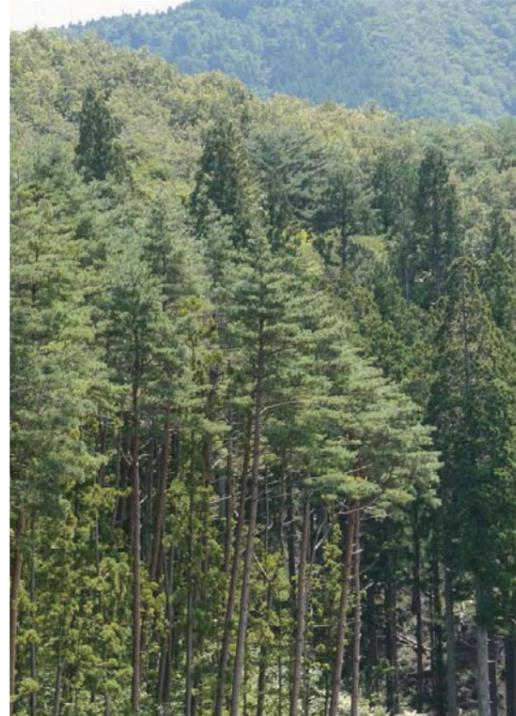
気仙地方の気候は、県内内陸部と比べ、一般に温暖であり、大船渡市の年平均気温は 11.3℃、年降水量は、1,512mm である。また、冬季の積雪はそれほど多くない。風向きは全般に北西～北西風が多い。

◇大船渡市の年間の気温と降水量（2012年）



出典気象庁ホームページより抜粋< <http://www.jma.go.jp/jma/index.html> > (2013年12月現在)

◇アカマツ林（大船渡市甫嶺地区）



◇りんご畑（陸前高田市）



◇田畑（住田町）



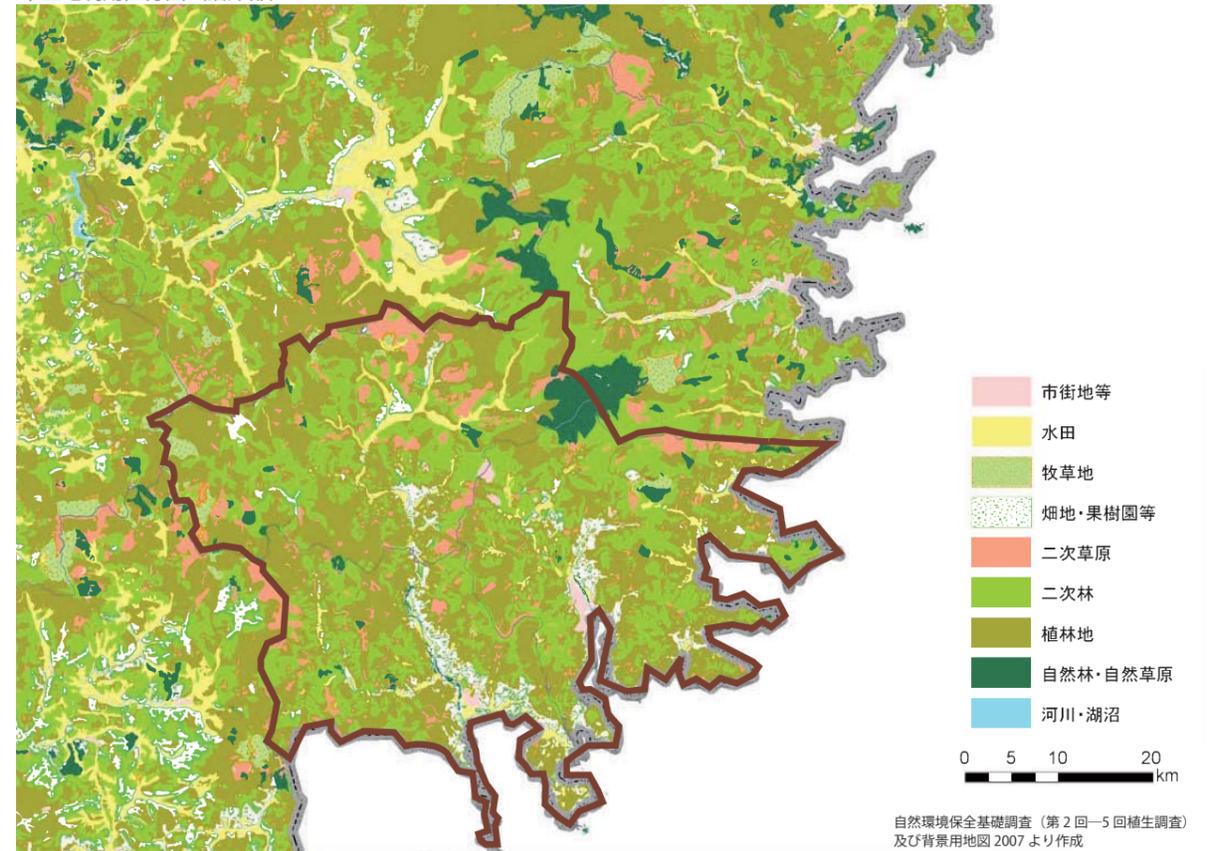
◇スギ植林地（大船渡市崎浜地区）



◇海岸に自生するツバキ（大船渡市崎浜地区）



◇土地利用区分図（沿岸部）



土地利用をみると、気仙地方の森林は約 76,000ha で、森林率は約 85%^{*4}である。そのうち民有林の人工林が約 34,000ha と約 54%を占める。人工林は、スギ・ヒノキ植林地のほか、アカマツ植林地が広い範囲を占めている。農耕地は約 3,100ha で、そのうち約 1,500ha が田、約 1,600ha が畑とわずかに畑地が多い^{*5}。また、市街地は沿岸部を中心に発達しているが、東日本大震災で壊滅的な被害を受けている。

自然林のうち、沿岸部は碓石海岸以南のクロマツ林を除くと、アカマツ林を主とする自然林であるが、海流の影響を受け北方系と南方系の植物を見ることができる。特に、気仙地方はツバキの北限地域であり、大船渡市、陸前高田市の市の花はツバキである。

内陸部は、二次林であるクレーミズナラ林、クレーコナラ林などが広い面積を占める。特徴的な植生としては、崖縁部のラセイタソウ-ハマギク群落、コハマギク群落、ハマニンニク^{*6}があり、局地的な植生・植物としては、五葉山のシャクナゲ群落、氷上山や夏虫山のツツジ群落、長崎海岸のヤブツバキ-ヒサカキ林、熊野神社の三面椿、越喜来地区の三陸大王杉などがあげられる。また、国指定名勝であった高田松原は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けているが、松原の再生に向けた取り組みが検討されている。

動物のうち、哺乳類は、広大な北上山地に連続しているためカモシカ、シカ等の大型動物が、鳥類については、海岸の断崖や岩礁地、孤島等に繁殖するウミネコ、クロコシジロウミツバメ、ミサゴ等の生息が特筆される。また、透明度の高い海では、ウニ、ホヤ、アワビ、アイナメ、メバル等をはじめ豊富な磯の生物及び海洋動物が見られ、陸、海ともに自然性の高い地域である^{*6}。

*4 岩手県流域圏別森林面積総括表（平成18年度現在）
 *5 市町村別データ 長期累年 耕地面積【岩手県】：農林水産省
 *6 三陸復興国立公園指定書及び公園計画書

Ⅲ 気仙地方における生活の営みと「里山文化」

気仙地方の沿岸地域は、リアス式海岸に面して住居と農地で構成される集落が発達し、さらに集落背後には様々な恵みをもたらす里山を抱えている。この地形的特徴から高度経済成長期以降も、半農半漁の生活が営まれており、海と里と山にそれぞれ人の手が加えられ、美しい景観を維持していた。そのため、山、里、海に関わる伝統や技、それらを総合した文化がそれぞれの集落で継承されると共に、山、里、海の空間が互いに密接に関わって、集落の個性をつくりあげてきた。

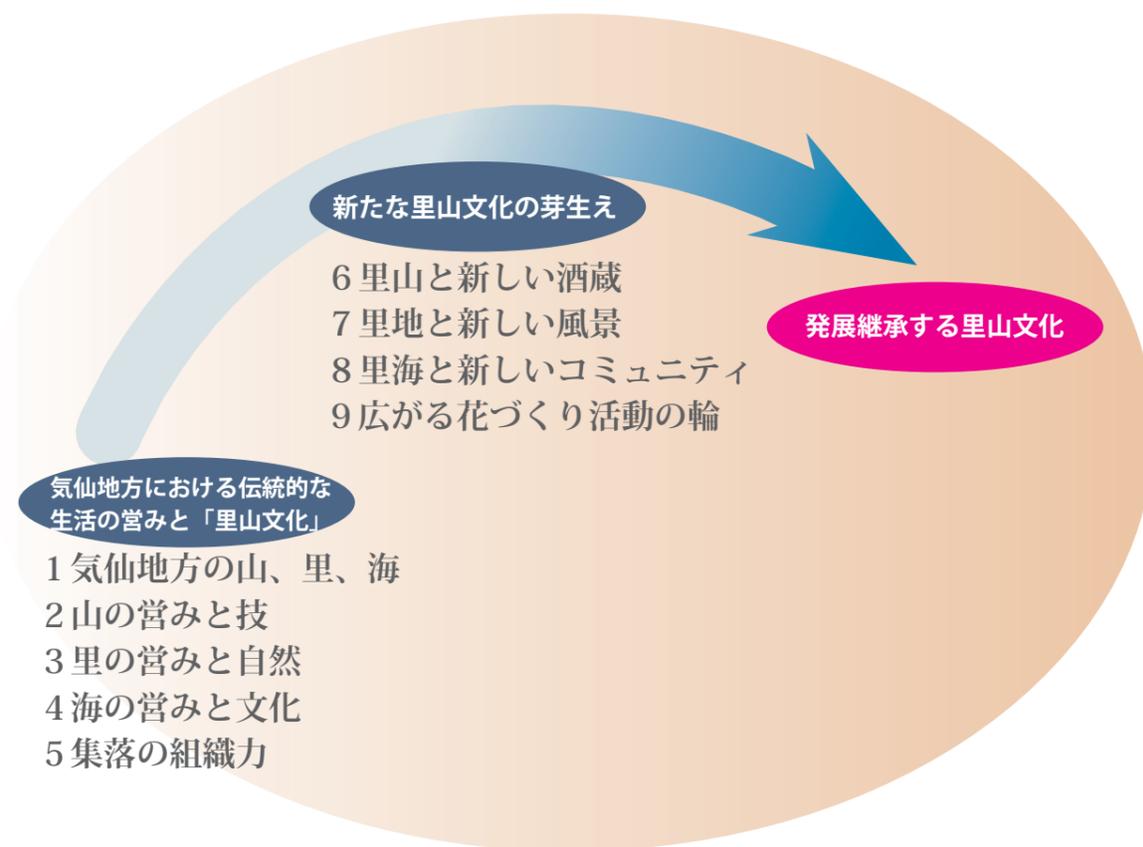
しかし、東日本大震災によって、山や里、海に大きな被害がもたらされ、特に浸水地域では長く培われてきた山や里、海の営みが根こそぎ失われることとなった。

一方で、気仙地方沿岸部では、甚大な被害を被ったものの、多くの分野や立場から復興、再生に向けた活動が着実に進められている。また、生活の営みに関わる身近な文化の継承が重要と認識されている。

このため、気仙地方における伝統的な生活の営みと「里山文化」について5組9人を対象に、「気仙地方の山、里、海」、「山の営みと技」、「里の営みと自然」、「海の営みと文化」、「集落の組織力」について、聞き取りを行った。

さらに、東日本大震災被災地域における復興過程で新たな「里山文化」の芽生えともいべき諸活動を進めている4組8人からも「里山と新しい酒蔵」、「里地と新しい風景」、「里海と新しいコミュニティ」、「広がる花づくり活動の輪」について聞き取りを行った。

こうした聞き取りを通じて、下図に示すように、地域の営みや集落の力でかたちづくられた気仙地方の伝統的な生活の営みに根差した「里山文化」は、復興過程で新しい産業、風景づくりなどの新たな「里山文化」として芽生え、広がっている。こうした気仙地方で活躍する人の「元気」が、「地域の里山文化」として、さらに発展、継承していくことを予感させる。



1. 気仙地方の山、里、海

大船渡市教育委員会
教育次長 金野 良一さん



PROFILE

- ・昭和33年生まれ。
- ・関西の大学卒業後、大船渡市に戻り学芸員として入庁。
- ・大船渡市立博物館館長を経て現在、教育委員会教育次長を務める。
- ・震災後は出身大学と災害復興に向けた連携協力の締結、被災地域の民俗、文化の継承等に尽力している。

『文化はその場所のアイデンティティーであり、震災で失われた地域のつながりを取り戻す力を持っている。』

〈気仙地方は旧伊達藩の文化を色濃く残す〉

気仙地方は現在の大船渡市、陸前高田市、住田町を指し、岩手県内にあった旧伊達藩の文化を継承している。伝統的な「鹿踊り」をみても、気仙地方は腹につけた締太鼓を叩きながら踊る太鼓踊り系であるが、南部地方は踊り手が鹿頭から垂らした布幕を両手に持って踊り、別に祭囃子の演奏者がいる幕踊り系である。

◇気仙郷土芸能祭りでの「小通鹿踊り」



大船渡市教育委員会提供

〈浜の人は山を信仰する〉

この地方では高い山を信仰する習慣がある。海上での自分の位置を知る機械設備の無かった時代、五葉山や氷上山等の山を見立てて、出漁先を決める「五葉つぶし」、「氷上つぶし」等もかつては存在し、浜の人と山は密接な関係があった。海上で働く職業である漁師は特に宗教心が強く、神様をお願いする習慣がある。特に女性は出漁した夫や家族を守るために祈るしかなかった。船が出入りする岬に神様が祀られ、船を見守っている。漁師は漁に出ていくとき、戻ってきたときにお祈りをする。大漁だった時は特に感謝をこめて祈りをささげた。

〈祖父についていけば何でも知ることができた〉

一般的に気仙地方の海に面している地域には山、里、海が明確に区分されるものではなく、山で林業を営み、里の畑で野菜づくり、養蚕業を営み、海で魚を捕る等、生業として全てのことを行ってきた。地域の人々は農協にも加入し、漁協にも入る半農半漁の形態がこの地域の特徴である。私も子供の頃は父と母も勤めに出ていたため、家にいるのは祖父と祖母で、祖父についていけば何でも知ることができた。山林の間伐、畑の手入れ、水田で代掻き、海では海苔の養殖等、山から海まで、全ての生業を学ぶことができた。

◇金野さんの出身地である赤崎地区
他の集落と同様に山と海が近い構造となっている。



〈この地域の漁業はつくり育てる漁業へ〉

半農半漁の生活形態だが、その中でも基幹産業は漁業である。昔は交通が発達していなかった事と、消費地まで遠いことから、干しあわび等の水産加工や自家消費が中心であったが、今では交通が発達し、遠方まで大量に輸送することが可能となっている。

また、昭和初期からカキ等の養殖がはじまり、現在では、ワカメやホタテなどの養殖でも安定した収穫が見込めることから、栽培漁業、養殖漁業がさかんである。一方で問題もあり、例えば近年、サケの放流を各地で行っているため、エサが減少し、魚体が小さくなる等の現象もみられるという。

◇大漁旗をなびかせて入港し、積み船に魚を移している風景
(綾里港にて) 昭和18年頃



出典 三陸町史 第6巻 産業編

◇養殖ワカメの刈採り



出典 三陸町史 第6巻 産業編

〈地域のつながりを取り戻す文化〉

この地域の文化は民俗芸能等、コミュニティーをベースとしているお祭り、行事などが多く見られる。震災後、仮設住宅への移転等で地域のつながりが失われ、存続が危ぶまれている。一方でお祭り、行事等の開催、準備をきっかけに各地の仮設住宅に住んでいる人が集まり、人々の心の拠り所となり、一時的であれ、自分達のアイデンティティーを確認する場となっている。このような活動に対して、どのような支援ができるか考えた時、「もの」である芸能の装束や道具をそろえることができても、地域の人と人とのつながり、「こころ」のコミュニティーを取り戻すことが、これからの課題である。

〈時間に合わせた文化の復興が必要〉

震災直後、まず必要なものは食べるものと寝るところであった。時間が経ち、気持ちに余裕が出てきた時に知的なもの、文化的なものに対する欲求が生まれる。震災後、他府県からの支援を受けて開催された、博物館でのワークショップイベントでは、人々の気持ちに余裕が出てきた頃だったからか、大船渡市立博物館の前に初めて行列ができる大盛況だった。復興も人々の気持ちの推移、欲求に合わせた時間軸で考えることが必要だと感じている。

◇開館前にできた行列



大船渡市立博物館提供

◇震災後に開催されたイベント



大船渡市立博物館提供

◇会場内の様子



大船渡市立博物館提供

2. 山の営みと技

株式会社鹿児島屋
代表取締役 及川喜久平さん



PROFILE

- ・昭和21年生まれ、^{はれい}
- ・大船渡市三陸町甫嶺地区出身、代々製材業を営む。
- ・震災では幸い工場は被害を免れ、被災地復興のため、本業以外の仮設住宅の杭の生産等幅広く手掛ける。
- ・製材業を営む傍ら、岩手の財産であるマツを保護する活動にも携わる。

『手入れをしないとマツの森は荒れる。山を見る人、目利きがしっかり森を見て、これからもマツを守っていかねばいけない。山に行き、海に行き、仕事をする事で越喜来の自然は守られてきた。』

〈震災の復旧過程では仮設住宅の杭生産、被災松の処理が早急に求められた〉

■30万本のうち3万本の杭づくり

東日本大震災が発生した時には、高台にいたため自分は助かったが、母は別の場所にて流されてしまった。母の供養のためにも何かできることをしたい、と考えていた時に、仮設住宅建設に使う杭の生産を頼まれた。もともと杭に使うような小径木は自社工場では扱っていなかったの一旦は断ったが、船を流された漁師さんたちは、何でもすると言ってくれた。そこで、20人の漁師さんに頼んで、4月1日から5月の中旬までに県内で必要とされた30万本のうち、3万本の杭を生産した。沿岸部で被災しなかった工場として、今後も内陸部の工場とタイアップしながら復興に何とか貢献したいと考えている。

■被災松材を活用した商品づくり

震災直後の陸前高田市では、高田松原の被災松が打ち上げられ、倒れて散乱していた。あちこちの漁港でも流された材があがっていたが、これを処理しないと養殖の作業もできない状況だった。また、海岸沿いの道路の車両を通行可能にするために、マツもガレキと一緒に処分されるような状況だった。マツを扱ってきた者として、「もったいない！」という思いがあり、NPOにも協力してもらい、トラック15台分、300m³の被災材を買取った。亡くなった人達の供養にもなるものと考えて、マツの赤みの部分を数珠とブレスレットに加工した。数珠は6万個製作し、当初は生産が間に合わないほどだった。数珠の売り上げのうち500円を陸前高田市に寄付する仕組みで進めている。これからも木材の加工販売で大船渡、陸前高田の復興に役立てたいと考えている。

◇「奇跡の一本松」で造られた数珠



〈マツにこだわってこれまで仕事をしてきた〉

■マツ一本で仕事をしていこうと決意

もともとは、父親がパルプの生産加工をしていたが、昭和45年頃、三陸鉄道が開通したので、矢板の需要があり、それを製材したのがマツを扱うきっかけになった。この地域の大半の製材工場はスギを扱っているが、梁丸太になるマツはあまり手掛ける人がいない時代で、国産材を扱う人も少なかった。しかし、関東では、マツを化粧材として使う需要があることを知った。この時が仕事を続ける上での分かれ道だったと思うが、競争が激しいものを避け、マツ一本で仕事をしていこうと決めた。

■出雲大社の遷宮にも被災直後にマツを納めた

マツ材を扱っていることが全国で知られるようになり、左官工事の大手の会社から文化財の修復に、マツ材を頼まれた。それ以来、文化財用の木材を中心に扱っている。出雲大社の遷宮に使われたマツ材は300年生の赤みのマツで600mm×450mmの梁材。震災前に受注し、納入が遅れないかと心配したが、多くの人の協力で無事に納入することができた。

〈南部松は岩手の宝だ〉

■松枯れ対策は重要

岩手県下も松枯れの被害が甚大であるが、このあたりでは被害を食い止めている状況だ。しかし、温暖化の影響か、5～6年前から沿岸部でも被害が増えている。マツノマダラカミキリは暖かくなると活動せず、沿岸部ではヤマセの影響で5～6月まで涼しいので被害を食い止めていたが、最近は3～4月にマツノマダラカミキリが活動を開始している。マツを守るためにも行政と一緒に考えて対策を考えないといけない。

■松枯れ被害木の活用

岩手のマツは、松枯れ被害木であっても、周りを剥けば、中心部の赤みのところは材木として十分に使える。材として使用できるマツは基本的には天然木であり、材木になるまでに成長するには長い時間がかかるので、廃棄処理するのはもったいない。何とか活用する方法を考えたいと、これまで取り組んできた。

〈ここでは海でも山でも仕事をする〉

■物心ついた時から山でも海でも遊んでいた

こどもの頃は山に行き、じいさんの仕事ぶりをみていた。漁業権もあるので、小学生の時からウニやアワビ、ワカメをとっていた。中学、高校のときには、漁期には授業がなかったほどだ。今でもウニやアワビの口開けには、海にはいることもある。このあたりの人は、海でも山でも仕事してきた。

■崎浜とは湾を越えてつながっている

ここ甫嶺は、崎浜の対岸だが、甫嶺の龍昌寺の植家には崎浜の人もある。母は昭和24～25年頃に大船渡で生活用品を仕入れて、船で崎浜まで行って、販売していた。このあたりにバスが通ったのは昭和32～33年頃だから、それまでは船で行き来していたなごりか、湾を囲む地域は、海を越えて今でもつながっている。

◇工場と土場



◇工場周辺のマツ林

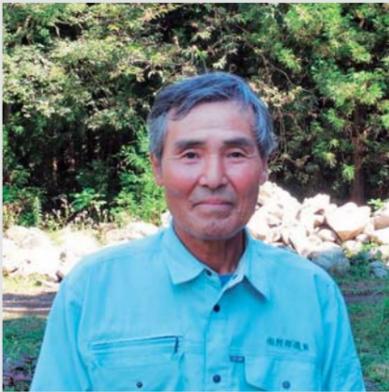


◇甫嶺から越喜来湾を望む



3. 里の営みと自然

有限会社阿部造園
代表取締役 阿部信男さん



PROFILE

- ・昭和 19 年生まれ。
- ・岩手県大槌町出身で、現在の住まいと事務所のある大船渡市立根町に来て、50 年になる。
- ・造園業を営み 47 年。厚生労働省が表彰を行う「現代の名工」として、個人邸から公園まで岩手県内を中心に幅広く活動を行う。

『子供の頃に自然の中で過ごした経験から

庭づくりの仕事を目指した。

このあたりはツバキの里。何を植えるか考えるとき、まずはツバキを植える。』

〈小さい頃、自然の中で過ごした事が今の仕事に生きている〉

■こどもの頃は山に入っているものを食べた

子供の頃の遊びといえば、野山で遊ぶ、チャンバラをする。戦後すぐの頃で食べ物が無かったため、山に入って食べ物を探すが、遊びの一つだった。

春は山菜、タケノコ、夏はキイチゴ、クマイチゴ、秋はクリ等、自然の中にあるものをいっぱい食べた。今では秋になって、実がたくさん付いた柿の木も誰も見向きもせず、実がついたまま。それだけ食べ物が豊富になったことだが、人が山に入ることが少なくなったことでもある。

昔はスギ林の中は、手入れが行き届いているため、山の上まで、山の奥まで中を見渡せた。今は管理されていないため奥が見渡せない。また、林床が管理されず隠れ場所が増えたことによって、シカ等の動物が増えている。畑、森が荒れていっている。

学校から帰ると家の畑を手伝って、仕事がないときは山の中で遊ぶという生活。今の仕事で生きていこうと決めたのは 23 歳くらいの時。自分が造ったものがずっと残る事と、小さい頃から自然を見たり、自然の中で遊んだりするのが好きで、小さい頃に自然の中でいつも過ごしたことから自然を扱う造園という道を志したと思う。小さい頃の経験が今の仕事にも生きている。

■今も残る里山の利用

今は昔ほど採らないが、春の山菜（ワラビ、フキ、シドケ）が採れる。樹木の伐採等の仕事で出てきた薪は、薪ストーブを使っている人にゆずっている。昔は里山の木を使って家を建てていたが今はあまり使わない。スギを主に使い、他にマツ、ケヤキ、ヒノキ等、樹種毎に建物の部位に適した使い方があった。最近は一パーで花を買う人もいるが、里山、庭の花を仏壇にたむけるのも風習の一つだ。

■今も残る山と海の云われ

山と海に関する言い伝え等について「ツバキの花が多く咲いた年はカツオが大漁」、「桐の花の多い年はスルメ漁あり」等の云われは最近あまり言わないが昔、聞いたことがある。昔の人が考えたことだから正確な事はわからないが、きれいな花が多く咲くというのは、気候に大きな変化がなく、安定しているということ、潮の流れがよいということでもあり、海の漁にも関係している。子どもの頃によく聞いた、「麦の穂がでてくる頃は、磯で魚が釣れる」という云われが記憶に残っている。

〈この場所の材料を使って庭をつくる〉

■このあたりではまずツバキを植える やっぱりツバキの里だから

この地域の気候は仙台と同じくらい暖かい。同じ岩手県でも広葉樹中心にツバキ、タブノキ、サザンカ、モッコク等、内陸（盛岡等）で見られない樹種が見られる。内陸で常緑樹を使うとなると、針葉樹のマツ、スギ等の限られたものになるが、三陸では温暖な気候のため、花が咲き、丸葉で彩のある広葉樹を使うことができる。内陸に比べて冬はだいたい 3℃以上暖かく、「やませ」により夏は 3℃以上涼しい。関東地方の庭を参考に、実際に見て気に入ったものをここで植えることもできる。また、ツバキは大船渡市の市の花でこの地域はツバキの里。大船渡市の末崎町には樹齢 1400 年のヤブツバキがある。小さな公園等でも何を植えるか考えたとき、まずはツバキを植える。

◇末崎町熊野神社境内にある樹齢 1400 年の「三面椿」



■里が仕事の間

事務所の裏山からは五葉山の雄大な景観を望むことができる。この地域の山といえば五葉山で、昔はその周辺がニホンジカが生息する北限だった。また、高山植物をはじめ、珍しい五葉瑠璃（五葉ツツジ）、シャクナゲ等、多種多様な植物がある。

◇五葉山（事務所の裏山より）



〈この里の自然が仕事を支える場になっている〉

事務所の裏山には圃場や石場、採土場があり、材料として、使用する。圃場には灌木から高木まで地域に合った 樹種をストックしている。石場には地元の越喜来で採れる青石や、好んで使う花晶石を集めている。採土場の土は赤土と黒土を配合し、現場に出す。樹木の伐採等で出てきた薪もストックし、薪ストーブを使っている人に譲っている。

◇圃場



◇採土場



◇薪置き場



4. 海の営みと文化

大船渡市越喜来漁業協同組合
代表理事組合長

中嶋 久吉さん
昭和8年生まれ

崎浜大漁唄いあげ保存会

ワカメ塩蔵 上村 勤さん
昭和24年生まれ

カキ養殖 木下 勝人さん
昭和25年生まれ

組合職員 大上 豊明さん
昭和48年生まれ

PROFILE

大船渡市越喜来漁業協同組合

・大型自営定置網漁業、養殖漁業、磯根漁業が主力事業。

崎浜大漁唄いあげ保存会

・伝統文化である「ご祝い唄」の保存等、地元の文化継承発展に関わっている。



『海と山と人の
つながった
生業がここ
の特徴だ。』

〈定置網の設置は「山立て」「山掛け」の手法を用いた〉

海の深さを表す等深線が海岸線の入合い、また山の地形と一致するかどうかなど、定置網の設計施工と敷設には山との関わりが非常に重要であった。等深線調査図と同じ縮尺の定置網側の縮尺図を等深線上に何回も重ね合わせ、定置網の設置場所を検討したことが甦る。今日ではGPSで位置測定するのでかつてのような苦労はない。はえ縄漁業、一本釣り漁業、定置網の基点を定める場合には、「山立て」「山掛け」と称して、向い山の樹木等を目標に定めたものだ。濃霧のなかを航行中も、微かに見える山の遠景をみて、船の位置を読み取ったものだが、今は測量計器が発達して昔のようなことはない。



〈昔は木材を使って舟も仕事の道具も作っていた 海と山はつながっていた〉

■塩づくりは海と山と人のつながった生業だ

明治時代の古い絵図をみると、今と違って山林よりも柴山が多かった。「釜の沢」と呼んでいた山林に柴山があって、その山の薪を使って、釜に入れた海水を沸騰煮詰めて製塩をしていたようだ。戦後も崎浜では2～3人の人が製塩をしていた。

■舟や道具、棧橋も木製

船材は主に杉の木、櫓は桜の木、櫓は櫓の木、竹はアワビやウニを獲る道具として活用し、水深の深いところ（7～10m）では、桜の木の操を間にし、竹を繋ぎ合わせ使っていた。舟を曳きあげる時の道具として使った「コロ」、「カグラサン」も直径30cm以下の固い木の丸太を使っていた。その他、わら網を撚り合わせる道具である「ギッチョ」、「仲人」、カケヤ、樽、桶もみんな木材だった。湊にカッコ舟を係留するときにも、「カエデ」の木の曲りを活用して碇をつくっていた。その他、柿渋に糸を十分に漬けておくと、その糸を引き延ばして乾燥させ、もつれるのを防いでいた。

〈かつてはシイタケ栽培もさかんに見られた〉

文献によると、明治37年、越喜来の有力者であった南部屋の刈谷佑左衛門が、椎茸栽培の先駆者と言われている土屋氏（静岡県田方郡狩野（現：伊豆市）出身）に対し、「崎浜に来て椎茸栽培をやらないか」と持ちかけ、適地を探し、西風立付近の村有林を払い下げ、椎茸栽培が始められたとある。栽培規模は相当大きく、作業員宿舍施設を3棟建てた。常時30人前後の作業員を雇い、漁業が忙しく、働き手がいないうちは、上閉伊地方から作業員を集めた。

〈「木シマ」の多い家は富裕層に数えられた〉

薪を積み重ねたものを「木シマ」と呼んで、ある程度の太さの木を割り込み、積み重ねて乾燥させて、炉端で燃やした。「木シマ」の積み重ねの多い家は富裕層に数えられた。一軒の一年の薪の消費量は、およそ一棚（3尺×12尺）と語られ、雪解けを待って「春木切」を行った。「木切」は「棚木切」と「メ木切」があったが、一メは五尺縄の長さで巻き込んだ体積のことだ。

〈山菜は今も山の恵みだ〉

製炭は、仕出し製炭、賃焼、歩焼、自家製炭があるが、崎浜では製炭は明治末から大正年間が一番盛んで、焼子を雇って村山を払い下げ、木炭づくりをしていた。山菜は今も山の恵みでワラビ、シドケ、コゴミ、ウレイ、タラノメ、ミズなどの山菜は昔も今も採りに行き、秋にはキノコ狩りにでかける。

〈旧小正月には豊作と大漁の祈願を込める、二つの行事が存在したようだ〉

旧小正月に、豊作を願い、「みずの木」に団子を刺し、家の中を飾り付けた。飾り付けにはスルメや菓子袋などを吊るし、5日目の朝に団子飾りを刈り取るが、この間に吹く風の強弱で、出来秋の作柄への、風あたりが強いとか弱いとか親たちの語りが記憶される。サメ底刺網が旺盛な頃の旧小正月には、大漁を願い、乗組員が「ご祝い唄」を唄い、船頭宅に唄い込み、お祝いの行事に銭を蒔いた。これに子どもたちが加勢し、「前金勘定」（めえぎんかんじょう）と叫び、銭をもらい歩いたという。また、今は、正月も旧小正月のいずれも、船には「富来旗」（フライキ）をあげるが、幼い頃は旧小正月だけだったと記憶する。

〈ご祝い唄に合わせ、胴船のデッキを櫂で突く「ドーン」という音に感動した〉

和船のカツオー一本釣り漁業の「ご祝い唄」、建網漁業の「ご祝い唄」の2種類のご祝い唄があるが、同じ歌詞、異なる歌詞も含まれるが、異なる囃子に唄い分けられることができる不思議な唄であるとも言える。祝い唄の囃子に合わせて、櫂をそろえて船の甲板をついて、拍子をとった。「ドーン」という音が鳴り、港が近づいてくるにつれて、拍子のテンポが速くなる。今とは違って木製の船だから音も遠くからも響いて聞こえ、迫力があつた。この崎浜の無形文化財ともいえる「ご祝い唄」を伝承するための保存会を設立して活動を展開してきた。東日本大震災の後、活動は中止しているが、平成17年3月に活動の一環として歌詞の収集、歌詞の注釈、唄い方、譜面記載などをまとめた「海幸の恵みに感謝の凱歌があがる」の冊子を発刊した。その他、サメの底刺し網時代豊漁で船主から送られた大漁看板衣装の再現、「ご祝い唄」を唄うときに櫂を突いて拍子をとる櫂40丁を製作したが津波で流出してしまったが、流出した櫂の補充を図れる日を期待している。

◇復元したご祝い唄の様子



出典：冊子「海幸の恵みに感謝の凱歌があがる」

◇「ご祝い唄」の装束と化粧櫂



ご祝い唄
ご祝（ゆわ）いは 繁ければよ お壺の松も
そよめく オホーヨ
お船玉は 大漁なさる 四つ出のお恵比須（えべす）
よろこぶ オホーヨ
目出度いは 三目出度いが 重（こさ）なる
オホーヨ

ご祝い唄は奇数で唄い止めることとされている。その唄の数は、三、五、七の句題で、三句題を例とし、一句は、「ご祝いは」二句は「お船玉は」三句は「目出度いは」が歌詞の順序で唄うとされている。
その他、ご祝い唄は、入れ舟に唄い、出舟に唄うことは、御法度とされている。
出典：冊子「海幸の恵みに感謝の凱歌があがる」

5. 集落の組織力

社団法人崎浜公益会
 会長 遠藤喜隆さん
 昭和 17 年生まれ
 副会長 中嶋幸平さん
 昭和 32 年生まれ



PROFILE

- ・住民の協働と相互扶助をもって発展向上を図ろうと明治末期に崎浜部落会が組織され、その運営に資する財産として「大六山」入会林が当てられた。入会林野に関する法律改正がきっかけとなり、昭和 52 年に社団法人崎浜公益会が設立された。
- ・公益法人法の改正に伴い、組織は平成 25 年度途中から地縁団体となるが、これまでの事業は継続しながら、地域の発展を目指していくこととしている。

『崎浜地区浸水地域の今後の土地利用についてはこれからみんなで考えないといけない。豊かな発想をもって、これからの崎浜が発展できるよう復興地域づくりを進めていきたい。』

〈自治組織の力で崎浜は発展してきた〉

■崎浜における自治組織の変遷

崎浜は、集落自治の歴史が長い。崎浜東西全戸をもって明治末期頃に「崎浜部落会」が結成されたが、部落会の各種事業の運営にあたって必要とされる資金を確保するため、個人所有であった山林を明治 34 年に買い受けた。買い受けた山林は「大六山」と称し、集落の西側に位置する。「崎浜部落会」は「大六山」の植林及び管理による収益によって崎浜地域の環境整備や公共事業を進めてきた。

戦後の昭和 21 年には、名称を「崎浜民主会」として構成員 195 名で再結成された。「崎浜民主会」では、公民館建設及び公民館活動への補助、部落運動会などレクリエーション事業への補助、郷土芸能保存育成への補助、部分林造林など、公共施設の整備や森林整備、各種集落活動の進展に力を注いできた。

そのなかでも、昭和 33 年に竣工した崎浜簡易水道工事、昭和 27 年に起工した崎浜漁港修築工事などの公共事業の進展に大きな力を発揮した。「崎浜部落会」、「民主会」とともに、崎浜に住所を有する者をもって組織し、共有する財産の管理運営に伴う収益によって崎浜の発展と住民の生活向上につとめてきた。しかし、任意団体から組織を明確化して活動を効果的に推進するとともに、共有林である「大六山」の育成にも本格的に取り組む必要があった。そのため、昭和 52 年に、個人共同所有であった約 31 ヘクタールの共有林「大六山」を効率的に管理運営して収益をあげることを目的として、任意団体としての「崎浜民主会」を発展的に解消して「社団法人崎浜公益会」が設立された。



■大六山の謂れと所有関係

大六山は、享保 8 年（1723）2 月に、当時の仙台藩主伊達吉村が南部境巡視という名目で、家臣を従え 3,700 人余りの勢子で山を焼かせ、250 丁の鉄砲で鹿を追い狩したということが伝えられている。

明治時代は農商務省管轄の官山であったが、明治 38 年に大船渡市盛町在住の刈谷友治が政府から払い下げをうけて個人所有林とした。刈谷は大六山でシイタケ栽培や薪炭業を営んでいたが、明治 29 年の大津波や二度にわたる大火災で甚大な被害を被った崎浜部落の復興を目指して、部落から刈谷友治に山林の譲渡を申し出た。双方の譲渡交渉が成立して、大正 4 年に大六山は崎浜部落民の所有となった。

戦後は雑木を伐採して、スギを植林して現在まで人工林管理を進めるほか、旧越喜来村所有の土地 15ha を借りて植林している。

■崎浜公益会の活動

「崎浜公益会」は、森林資源の維持培養により、その収益をもって地域住民の福祉及び厚生に関する公共施設の整備拡充並びに公共事業の推進を助成することを目的としている。また、森林の造成及び処分、農林漁業の振興に関する調査及び研究、教育・文化・保健等に関する施設の拡充などを主な事業とした。木材価格が低迷していない時には、一年間の自治会活動をまかなえる程度の収益をあげており、昭和 50 年代までは公益会の構成員で植林や草刈りなどにもあたっていたが、現在は手入れが進まず、森林は高齢林化している。その他、公益会が主体で開催する行事として「崎浜ふるさと祭」が 4 年に 1 回ある。

現在、公益会の構成員は 203 人で、震災前まではゴミステーションの管理や集落内道路や白磯公園の草刈りなどの環境整備にあたっていた。また、平成 22 年には集落中央を走る基幹道路である市道小壁線の完成にも公益会が尽力した。さらに、震災で中断している下水道工事も時期は未定だが再開される予定で、各世帯の負担金についても平成 18 年から積み立てている。崎浜公益会は、平成 25 年 11 月をもって公益法人法の改正に伴い、社団法人から大船渡市の地縁団体へと組織改編を進めているが、活動の目的や事業内容は継続していく予定である。

〈復興に力を注いでいきたい〉

崎浜は、ウニの口開け、アワビの口開けなどのように、海の資源を大切にしている習慣が今も維持されている。また、ワカメの養殖のはり網や船の碇の清掃、土俵づくりなど共同で行う作業も多い。

東日本大震災後、いち早く崎浜復興会議を立ちあげたのも、これまでの様々な困難を乗り越えてきた集落の力があつたからだと思う。崎浜では、平成 25 年 2 月までに計 63 隻の漁船が浜に戻ってきた。これからも、崎浜の暮らしを豊かにするために集落の力を発揮して、復興に力を注いでいきたい。



崎浜地区復興会議提供

6. 里山と新しい酒蔵

酔仙酒造株式会社
製造部商品課長 佐藤昭博さん
昭和 36 年生まれ
総務部総務課長 村上雄樹さん
昭和 52 年生まれ



PROFILE

- ・気仙地方を発祥とする地酒蔵元。
- ・昭和 19 年企業整備令によって気仙地方にある 8 つの蔵元が一つにまとめられ誕生した「気仙酒造」が「酔仙酒造」の前身。
- ・震災では陸前高田市の工場敷地全体が大津波にのまれ、大きな被害を受けたが、一関市での仮操業を経て、2012 年 8 月 22 日 新工場「大船渡蔵」が完成した。

『津波の後、偶然鉄骨に引っ掛かり、瓦礫の中から顔を出した酒樽。この光景から復興への歩みが始まった。』

〈大船渡蔵の完成〉

酔仙酒造の移転地である今の場所は、造成され更地のまま残っていた場所だった。主にトヨタ紡織からの支援で、10 月 1 日に出荷する商品「雪っこ」に、間に合わせるため、2012 年 3 月に地鎮祭があり 2012 年の 8 月 20 日に竣工するという速さで工事は進んだ。

◇瓦礫の中から顔を出した酒樽（今は大船渡蔵の玄関に展示されている）



酔仙酒造株式会社提供

◇現在の酔仙酒造



〈蔵人曰くこの地には「強い水」がある〉

酒づくりに大切なものは水と空気（風通し）だが、この場所にはそれが備わっている。蔵人が「強い水」と表現する近辺の山を源流とする水と、海に近く塩分を含んだ風は、酔仙酒造にとって欠かせないものとなっている。敷地内には 11 本の井戸があり、水は井戸からくみ上げる。酒づくりにとっては気温の低い方が向いているが、岩手県内陸部に比べてこの地方は気候が温暖で冬は暖かく、夏は涼しい。

◇蔵の周辺を流れる小川



〈酔仙に行けば一年中花が咲いている〉

気仙酒造として創業した当初、社員や周りの人が集まって、思い思いに敷地内に植物や花を植えた。地域の人からは酔仙に行けば一年中花が咲いていると言われていた。桜の季節を中心に近所の人が散歩に来るような場所だった。大船渡の蔵もこのよう花や緑があふれる場所にしたいという思いがある。酔仙酒造の OB からも「次の春には花見がしたい」という声があり、「百花の庭」づくりに向けて、桜が植樹される等、かつての風景を取り戻すべく庭づくりが行われている。

◇ボランティア活動により植樹された桜



◇社員が手入れをしている花壇



〈普段から草木や花、季節を感じることで酒づくりの際に必要な第六感が研ぎ澄まされる〉

蔵人にとって、酒づくりをする上で、普段から、自然に囲まれた環境で過ごし、その場所の空気や花や草木の色づきから季節を五感で感じる。これにより酒づくりの際に必要なタイミング、時間などをはかる“第六感”が研ぎ澄まされる。かつては蔵人は夏に農業、冬に酒づくりを行っていた。これからは後継者の育成が課題になる。

◇針葉樹林に囲まれた丘の上に蔵は立地する。



〈地域への貢献〉

まず、企業が元気にならないと復興にはつながらない。酒造メーカーとして、直接販売するのではなく、地元還元できるように、できるだけことはしていきたい。今年の夏も工場見学に多くの人々が来訪された。しかし、この地方の土産として各店舗で購入してもらいたいため、ここではなるべく直接販売しないことにしている。大船渡の経営者は力がある。この力を復興まちづくりに活かすことができると信じている。

■酒づくりの一年の流れ

〈初洗米の日（8 月中旬）〉

仕込みがはじまる前の日を初洗米の日という。
10 月 1 日の日本酒の日に合わせて仕込みを始める。

〈日本酒の日（10 月 1 日）〉

初出荷の日。神主さんによる祓いをする。
杉玉を新しいものに交換する。

〈甑倒しの日（3 月）〉

その年の仕込みが終わる日であり
蔵人たちをねぎらう日でもある。

蔵の玄関に吊るされた杉玉。吊るされたばかりのものはまだ蒼々としているがやがて枯れて茶色がかってくる。

10 月 1 日



酔仙酒造株式会社提供

翌年 8 月下旬頃



7. 里地と新しい風景

花っこ畑
吉田正子さん

PROFILE

- ・ 陸前高田市小友町出身。
- ・ 小学校教諭時代より約 20 年間、オープンガーデンをはじめとした自宅周辺の庭づくりにたずさわる。
- ・ 津波により作ってきた庭は全て流されてしまったが、ボランティア等の支援により活動を再開した。

『他の人が元気になると自分も元気になれる。
自分が楽しいことをして、
人の役に立つことができればうれしい。』

〈園芸植物と野生種を共存させたい〉

庭づくりの根底にあるのは子供の頃の生活で、花が好きで土と一緒に生活が日常だったこと。現在の庭に植えているものも子供の頃に見た植物、風景が元になっており、ハンゲショウやオオセンナリなど、地域に自生する植物や、野生種を中心に庭に植えている。庭づくりのポリシーは、園芸植物と雑草や野生の植物を共生させること。園芸植物よりも、オオケタデ、オオセンナリといった野生種を多く植えている。高価な園芸植物を買ってきてもすぐにだめになる。また、雑草と呼ばれる草本植物も庭に陰をつくったり、湿度を保つ等の機能を持っているため積極的に使い、その土地に根差したものを植えている。

◇津波を受けても流されずに残った
ウラジロハコヤナギ

■メドウの庭「花っこ畑」、ガーデンデザイナー設計による「希望の庭」の2種類の庭がある。

◇花っこ畑



◇希望の庭



庭に咲く花

オオケタデ



フェンネル



オオセンナリ



ハンゲショウ



矢印付近まで津波は遡上した



〈思い入れのある植物を植える〉

ハンゲショウは出身地の小友に自生しており、小さい頃から好きだった植物。一度全滅したが、たまたま全滅する前に自分の庭に植えていた。保護したいという思いもあり、ハンゲショウは自分の庭とは切り離されないものとなった。またオオセンナリは漢字で書くと「大千成」という字であることがこの植物を好む理由である。

〈身近な植物が遊び道具だった〉

子供の頃は植物でよく遊んだ。チカラシバで足にひっかける罫をつくる。チカラシバが生えているところには、シオカラトンボが一面たくさんいた。子どもの頃の思い出の風景だ。

シュンランは口に入れて飛ばして遊ぶ。アツモリソウ、カタクリ、ホタルブクロ等は花や葉っぱを梅干しや酢につけて色をつけて、口で膨らまして風船を作って遊ぶ。ホタルブクロは子どもの頃、夕方歩いていると白い花が目立っていた。それをとって遊んだ。

〈花を介したコミュニティの力〉

この地域では、仏壇に供える花は自分で作るという習慣が今でも残り、毎年生えてくる宿根草で切り花にできる茎のしっかりとした花を庭先に植える。草とり等の手入れをするのは留守番しているおばあさんの仕事(役割)だった。花がたくさんある家では近所に分けたり、庭先の花を通して通りがかった人と会話が生まれ、花を配ったりする習慣があった。

〈三陸の自生植物がつくる新しい庭を〉

近所の人達、ボランティアの助けをかりて活動を行っているが、いつまで手伝ってもらえるわけにはいかない。一人で庭の世話をするとなるとずっと続けていけるかわからないという不安がある。大型機械をいれてやるのではなく、人の手でやる仕事。今まで助けてもらった人たちに報いるためにもがんばらなければならない。今後の目標は、三陸に自生している植物を中心に庭を作っていくこと。また、雑木林を作り、新緑、紅葉等の季節の移り変わりを感じることができ、鳥等が集まる場所を目指したい。

8. 里海と新しいコミュニティ

特定非営利活動法人
いわて地域づくりセンター
常務理事 若菜千穂さん
昭和 47 年生まれ
研究員 早野こずえさん
昭和 54 年生まれ
研究員 太田陽之さん
昭和 62 年生まれ
スタッフ 阿部千秋さん
昭和 42 年生まれ

PROFILE

- ・地域自ら持続的な地域づくりを進めていくための中間支援組織として、平成 17 年 9 月に特定非営利活動法人の認証を得て、岩手県内を中心に幅広く活動を進めている。
- ・東日本大震災前は、主として農村を対象に各種支援活動を進めていたが、震災後は漁村地域を対象に、復興地域づくりも含めて支援事業に関わっている。



『横のつながりを大切
にしながら
コミュニティの力を
十分に発揮できるよう
復興まちづくり・地域
づくり計画をまとめて
いきたい。』

〈農村と漁村の交流事業がきっかけで崎浜地区の復興支援に関わりはじめた〉

平成 20 年度から農林水産省の農山漁村地域力発掘支援モデル事業を活用し、花巻市浮田地区（農村）と大船渡市崎浜地区（漁村）の交流事業がはじまり、センターも事務局として交流事業に参加したのが崎浜との出会いである。平成 21 年度には浮田地区の住民が崎浜地区漁港の清掃や定置網の体験をする他、浮田地区で子どもから大人まで楽しめるスポーツ交流など活発に交流が行われた。2 年目である平成 22 年度には両地区における農産物や海産物の直売交流も定着してきたさなか、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した。震災後は、浮田地区から被災を受けた崎浜地区への支援物資輸送、崎浜地区の休耕田を利用した供養花の植栽（ふるさと農園）、崎浜地区で農産物を販売する「ふるさと市」など、被災地区の支援を通じた交流に移行し、現在も活発に交流が続き、センターも交流活動の事務局として参加している。

〈「崎浜復興会議」の支援活動をはじめた〉

東日本大震災で崎浜地区は約 50 世帯が被災したが、崎浜小学校に設置された応急仮設住宅に 23 世帯が入居し、学生向け賃貸アパート（みなし仮設）に 20 世帯が入居した。こうした被災状況から、迅速な復興を実現することを目的として「崎浜地区復興会議」を地区が主体的に立ち上げ、「いわて地域づくりセンター」の代表理事広田純一（岩手大学農学部教授）および若菜常務理事も委員の一人となり、復興計画の検討を支援してきた。

平成 23 年 6 月 29 日の第 1 回復興会議から現在までの期間に 15 回の会議が開催された。会議では最重要課題を住宅再建とし、被災世帯の集落移転で合意を図った。その後、移転候補地の現地調査、候補地の課題の絞り込みなどを議題とした。また平成 24 年 1 月には第 1 回被災者連絡協議会をたちあげ、住宅再建に関わる相談会も支援している。「いわて地域づくりセンター」は、活動のためのファンドの獲得や行政からの補助金の確保など、こうした活動を継続するための経済的基盤づくりにも関わっている。



崎浜地区復興会議提供

〈コミュニティの力で被災地を支援していきたい〉

■ 3つの活動チームによる地域づくり活動

「崎浜復興会議」は崎浜公益会役員、被災者、岩手大学、NPOなどの地域住民委員と外部委員あわせて 22 名で構成されている。この復興会議委員に地域住民が加わって、復興地域づくりが円滑に進むように 3つの活動チームを立ち上げている。「番屋チーム」は被災地域にみんなが集まれる場所を早期につくろうという「おとうさん」が中心のチームで、神奈川大学の三笠友平先生の支援で「浜らいん」と名付けた交流の建物をつくりあげた。「記録誌チーム」は被災者の女性が中心のチームで、崎浜の昔の写真や懐かしい写真を集めた記録誌を作成している。「ホームページチーム」は地区の 20 代の若者中心に活動するチームで崎浜の「今」を情報発信している。こうしたチーム活動の支援は、自立した地域づくりを進めていくうえで重要な活動である。

■ 田野畑村における復興支援

崎浜地区に加えて、漁村地域への復興支援としては、田野畑村において、福祉関係者や村職員と一緒に「たのはた生活・福祉プロジェクト協議会」を立ち上げ、「入浴・買い物バス」の運行による外出機会の創出と地域活性化に向けた実証運行事業を進めている。この事業は 3つの集落が壊滅的な被害を受け、244 世帯 701 人が被災した田野畑村内の全住民を対象に進めている。田野畑村では住み慣れた集落を離れて仮設住宅の生活がはじまり、仮設住宅等へ移転した世帯では、「外出の機会が減った」、「部屋を訪ねてお茶を飲むスペースがない」などが課題となっており、被災地に残った世帯では、「集落内の商店流出や三陸鉄道の運休による移動手段の不足」が課題となっていた。さらに仮設住宅等と集落内世帯とのコミュニティの分断も問題であり、これらの課題を緩和することを目的として平成 23 年春頃から始まった。「入浴・買い物バス」は、村内の全集落を隈なくめぐり、週 4 日運行するもので、「お昼ごはんとお風呂付き」で 1 回の料金は 700 円である。このバスの運行によって、被災した利用者に笑顔が戻り、予想を上回る利用者数を数えた。この事業では従来のセクターではできなかったことに取り組み補完する「新しい公共」の役割を実証できたことで、多様な主体の連携と役割分担が行われた。

■ これからの復興支援活動

崎浜地区では、集団移転地の事業計画が確定して平成 27 年春には移転地の造成が完了する。「被災者連絡協議会」では個人に寄り添った住宅再建支援に向けて住宅見学会の開催や住宅情報の提供が必要とされている。また、「復興会議」では浸水地の土地利用計画の検討がこれからの検討課題となっており、継続して支援を進めていくことにしている。花巻市浮田地区との交流事業である「ふるさと市」と「ふるさと農園」は来年度も継続していきたいと考えており、実現の見通しがついてきた。

田野畑村では、バスの運行継続への要望が強いため、今後も各種助成金を獲得して継続を図っていききたいと考えている。漁村地域はウニやアワビの口開きのルールがあるように集落のものごとに対する「決め方」が継承されている。養殖を営むにも集落の構成員がみんなに関わることが多い。復興まちづくり、地域づくりにあたって、こうしたコミュニティの力が十分に発揮できるように、幅広く集落の活動を支援していきたい。



特定非営利活動法人いわて地域づくりセンター提供

9. 広がる花づくり活動の輪

希望の花いわて 3.11
代表 吉川三枝子さん



PROFILE

- ・96年から始まった岩手県内のオープンガーデンの主催がNPOの活動のはじまり。
- ・震災後、これまでの活動で得たネットワークを生かし、花と緑で被災地を支援すべく、現在の活動が始まった。
- ・地域の支援ニーズを収集し、支援者とのマッチングを行い、実現をサポートしていくことが団体の主な役割。

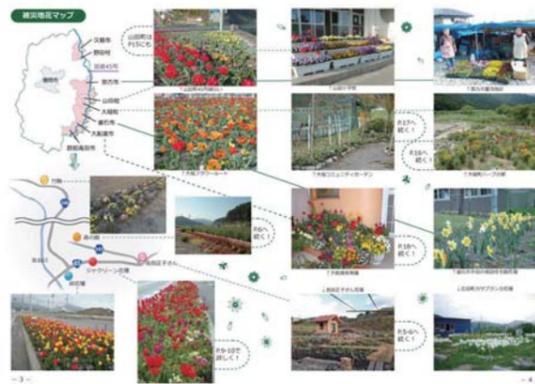
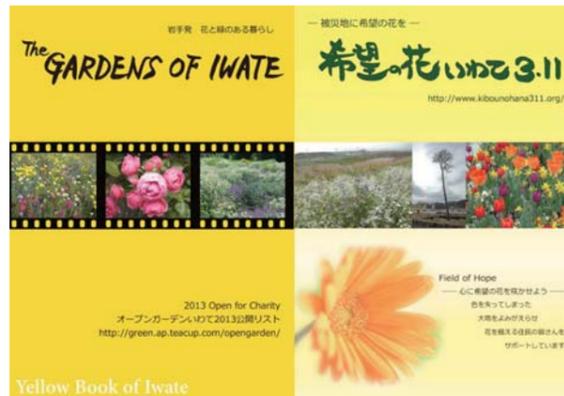
『花、植物の文化を全国に発信して、被災地の方、被災地で活動されている方と共に歩みながら岩手の花文化を根付かせていきたい』

〈被災地と支援者をバックアップする〉

庭づくりの活動の手伝いや、花の植え方指導も行いが、自分達は被災地と支援する人をつなぐ、バックアップするのが主な役割であると考えている。ガレキを処理した土と寄付してもらった花を使い、広大な花壇をつくるプロジェクトでも、現場で手入れをする人がいないとうまくいかない。今後は「希望の花いわて」が離れても、両者が直接やりとりを行える方向へ活動をシフトしていきたいと考えている。

■毎年発行している冊子

岩手県沿岸部の被災地を中心に、支援を行っている花壇やガーデンの地図、種まきのイベント等の情報発信を行っている。また、震災前から実施していた「オープンガーデンいわて」の公開リストも掲載し、「いわての庭」を発信するツールとなっている。



■震災を語り継ぐ象徴としての水仙の花

北国ならではの花として、関東以西では育ちにくい洋種の水仙がこの辺りではとてもきれいに育つ。震災を語り継ぐ象徴として水仙を考えている。



〈花を通してつながりが生まれる〉

被災地沿岸部は庭、家庭菜園がある生活が普通であるからか、提供した植物も上手に育てられていた。花好きの人が多く園芸に関する文化的な素地がある印象を受ける。種や苗の提供によって、「やることのできた、種をまく、植物を育てるもとの習慣が戻った。」と喜ばれた。

被災地では、花壇や花を育てるという活動は、初めは亡くなった方へ花を手向けることから始まり、その他、自分が住んでいた場所が荒れたままでは忍びないという思いやいろんな人と花を通してつながりたいという思いがある。実際に、観光バスが来たり、通りがかりの人が声をかけてくれることで交流が生まれている。オープンガーデンも花を通して庭好きの人が集まってコミュニティができた。被災地の花壇も同じでコミュニケーションの手段のひとつとなっている。

■希望の花いわてが支援する花壇 イベント

◇陸前高田 フラワーロード 花の植え替え作業



◇陸前高田 スマイル花壇 (岩手日報との協働支援)



◇大槌町仮設住宅 寄せ植え講習会



◇大船渡保育園 寄せ植えイベント



写真等は全て希望の花いわて 3.11 提供

〈庭づくりを通じて交流の場づくりを〉

被災後、1年目は仮設住宅を中心に個々に苗を届ける。2年目は誰でも見る、訪れることのできる共同の場所の整備に発展していった。3～4年後（今後）は、まちづくりに植物や花を取り入れ、新しい活動の拠点になればと考えている。例えば、冊子を作成すること等を通じて、被災地の庭めぐり、花のスポットの発信、ガーデンツーリズム等の企画を通じて、「岩手の庭」を発信していきたい。また、様々な場所をガーデンショップにし、庭づくりを通しての交流の場をつくりたいと考えている。時間はかかるが、現地の方と一緒に歩んで行きたいと考えている。

被災後1年目

被災地へ花苗
を届ける

⇒

被災後2年目

共同の場所の整備
・公共空間等で花壇
・寄せ植えイベント等

⇒

被災後3～4年目

まちづくりや活動の拠点
・ガーデンツーリズム (庭めぐり)
・ガーデンショップのネットワーク

IV 崎浜を事例とした里山文化の継承にむけて

1. 崎浜地区の概要

(1) 位置及び土地利用

崎浜地区は、大船渡市市街地より約 20kmの三陸町越喜来の東部に位置し、首崎灯台を最東端にもち、北西部には大六山（標高 514.8 m）東部に外山（標高 445 m）に囲まれている。

同地区の海域の南は越喜来湾、北は小壁や吉浜（きっぴん）アワビで知られる吉浜湾、西は浦浜に接する典型的なリアス式海岸となっている。

地区の面積は約 14km²で、そのうち森林が約 13.3km²と約 95%を占め宅地が約 12ha、畑は約 40ha、田が約 7ha である。森林のうち二次林が約 50%、スギ林が約 24%、アカマツ林が約 10%で、その他にヒノキ林、カラマツ林がみられる。また、岩手県内陸部と比較して温暖で、冬から春まで晴天が多い地域である。

◇土地利用図 S=1/5000



*大船渡市災害復興計画図及び現地調査より作成

- 主な凡例
 - 針葉樹林
 - 広葉樹林
 - 建築物等
 - 針葉樹林
- 代表的な土地利用
 - 針葉樹林



◇位置図



出典 国土地理院 地理院地図

(2) 人口動態

崎浜地区では、矢じりや土器の破片が発見されていることから、縄文時代中期には人間が居住していたとされている。その後の集落動態は明らかではないが、寛永 20 年（1643 年）の伊達藩による検地によって 18 戸が記録されている。さらに、明治 6 年（1873 年）の地図から判読すると 84 戸が数えられ、明治 29 年（1896 年）に 95 戸と推移している。当時の一戸当たりの人口の記録がないが、明治 29 年には 95 戸で人口が 657 人であったとの記録から、一戸当たり 6~9 人と一世帯当たりの構成員は現在より多かったと推測される。昭和に入り、昭和 8 年の三陸津波時には 1,368 人であった人口が、昭和 63 年には 1,186 人と減少した。昭和 60 年には、北里大学水産学部の学生が居住することによって人口減少に歯止めがかかったものの、震災後は北里大学の東京移転に伴い、学生人口が減少している。

(3) 産業

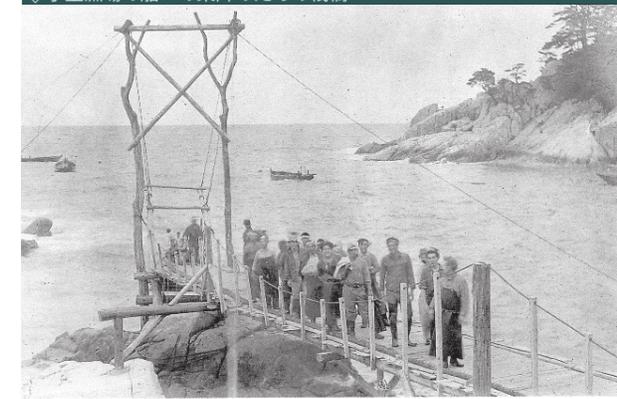
崎浜地区は漁業が主産業であり、18 世紀末から定置網漁業がはじまっていたとされる。昭和 14 年調査によると、崎浜漁業戸数は 141 戸で漁業人口は 948 人であり、建網業、いか釣業、捕鮑業、採藻業などに分類される業種が行われていた。また、水産加工製造業者は 11 者で、カツオ節、干しスルメ、魚粕などが製造され、昭和初期まで盛んであった。近年は、養殖漁業が盛んとなり、ホタテ貝、ホヤの養殖、ワカメの養殖・加工が続けられている。

岩手県は、明治 30 年代以降、薪炭生産が盛んであったが、崎浜でも明治末期から大正年間にかけて盛んに製炭が行われていた。当時は常に「焼子」とよばれる人を雇って炭を焼き、人力で浜まで運び、さらに船で塩釜まで廻送していた。昭和 9 年頃からは製炭者数人が村有地の雑木の払い下げをうけて製炭を始め、昭和 30 年頃からは農業協同組合に委託して販売するようになった。さらに、昭和 31 年に三陸村になった後、製炭原木伐採跡地にスギの造林を行った。造林後は製炭者及びその家族が育林業務に従事していたが、造林区域の拡大と共に、育林に多数の労働力が必要とされたこと、ガス・石油・電力などの燃料革命とあいまって、木炭生産は減少していった。

このように崎浜地区における林業は、木炭生産からスギ造林へと移行していったが、養殖漁業が盛んになり漁業収益が拡大することと木材価格の低迷によって、林業は低迷している。一方、同地区の農業生産をみると、戦前は麦、粟、ヒエを栽培し、裏作として大豆、小豆などが栽培されていたが、昭和 46 年頃には麦作をはじめ雑穀栽培が姿を消し、現在は自給用野菜の栽培が中心である。また、大正時代半ばから昭和 6 年頃までは養蚕も盛んに行われていたが、昭和 8 年の津波被害などをきっかけとして衰退した。

*1：出典：崎浜郷土誌 1~9 頁
 *2：出典：崎浜郷土誌 11~13 頁
 *3：出典：崎浜郷土誌 178~180 頁
 *4：出典：崎浜郷土誌 143~147 頁
 *5：出典：崎浜郷土誌 113~139 頁

◇小壁漁場の船への乗降のための棧橋



出典 崎浜郷土誌

◇木炭を生産する炭窯



出典 崎浜郷土誌

(4) 生活文化

岩手県各地では多様な郷土芸能を今に伝えているが、崎浜では正源寺を中心とした念仏剣舞、漁業に関連した「唄いあげ」、通称「ご祝い」などが伝承されている。剣舞は奥州平泉の地に果てた義経、弁慶主従の霊を弔う踊りとして伝承されており、その歴史は250～300年とされている。「唄いあげ」については、前述の「越喜来漁業協同組合」および「崎浜大漁唄いあげ保存会」からの聞き取り調査結果に詳細を記しているがいずれも地域の生活や生業と深く関わっている。^{*6} また、信仰の対象としては、碓山神社があげられる。碓山神社は大漁を願うとともに、安産や子宝に恵まれるようにと集落構成員のみならず近隣地域からも参拝されている神社である。さらに、正月にはマツ、ウメ、タケを船に飾るなど、豊かな生活文化を現在も継承している。加えて、崎浜地区には、首崎、鬼間が崎、仏が崎、衣磯、名号岩、大六山など謂れや伝説が伝えられる地名のほか、下の図に示すように、海岸部を中心に微小地形にも名称があり、海との生活との強い関わりが推測される。



◇崎浜集落の全景（震災前）

出典 崎浜郷土誌

◇崎浜地域の微小地名

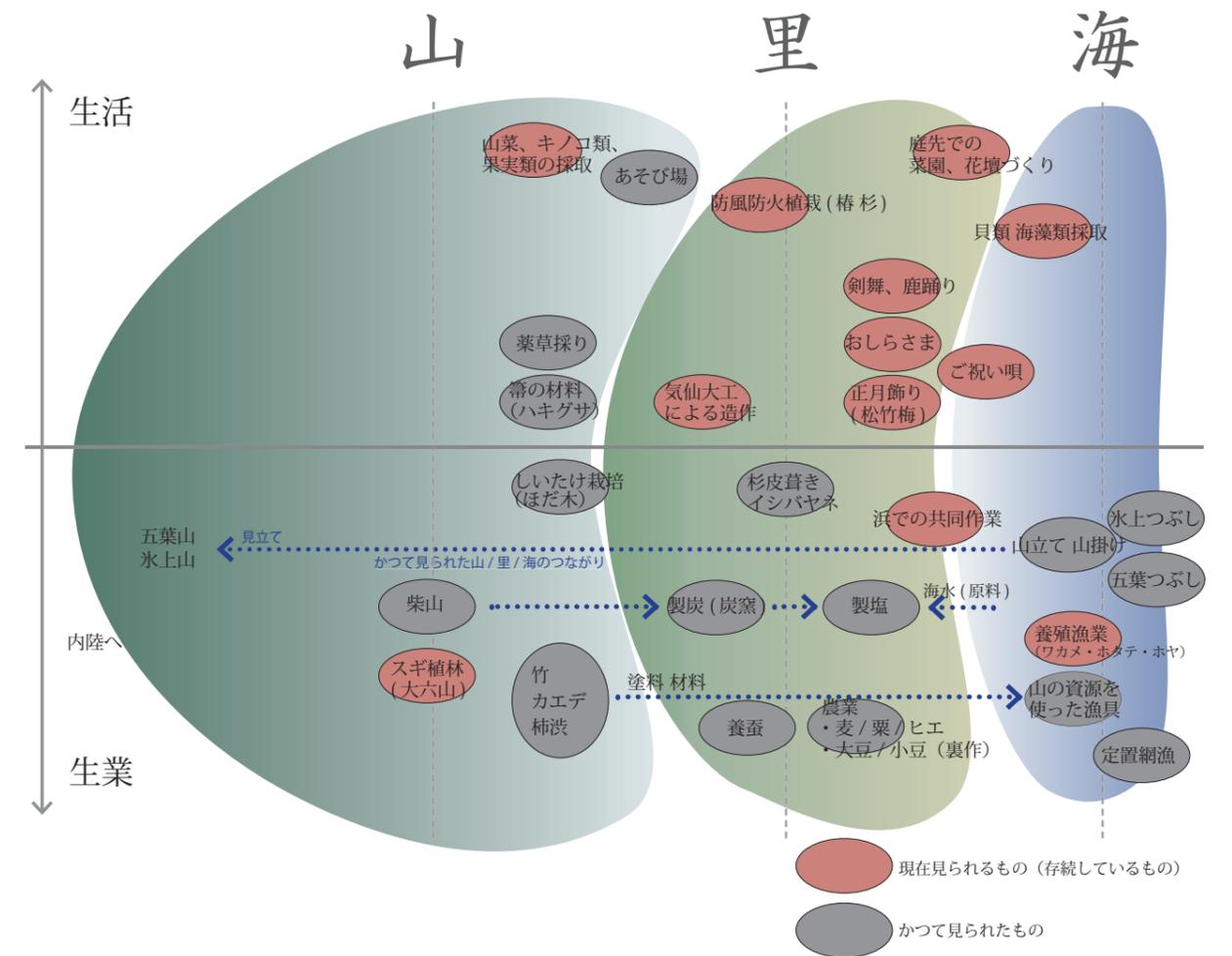
*6：出典：崎浜郷土誌 333～346頁



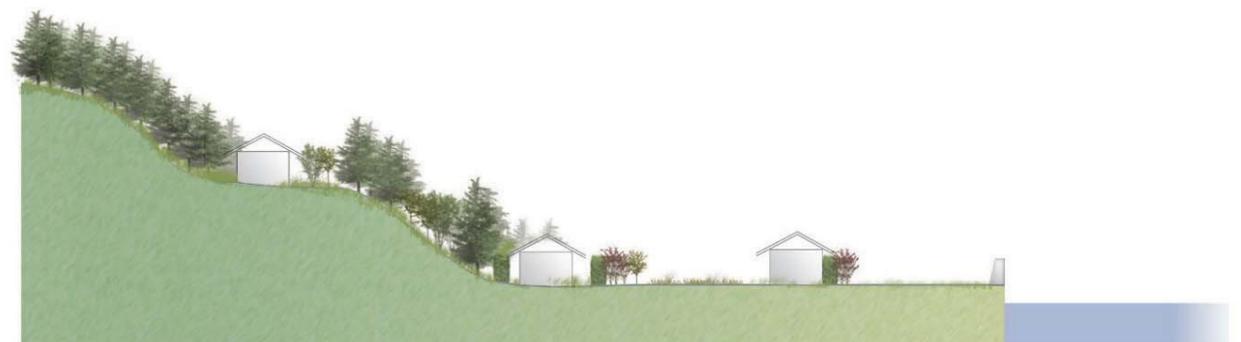
出典 崎浜郷土誌

以上から、崎浜地区の生業、生活に関わる文化の特徴と推移、ならびに山、里、海との関わりは次の図にまとめることができる。

◇気仙地方における生業、生活文化



◇断面図



2. 崎浜地区の「里山文化」の特徴

(1) 空間軸からみた里地・里山・里海の連環

崎浜地区における生活と生業に関わる文化について、里地、里山、里海の連環をみると、次の諸点が特徴とされる。

第一に明治末期から大正年間までは、製塩用燃料材あるいは木炭や薪の原木を里山から運びだし、里地の生活や生業に用いられていたことがあげられる。半農半漁の暮らしが営まれていた崎浜地区では、里山の資材が煮炊きの燃料や製塩の燃料材に用いられるだけでなく、木炭として生産販売することによって、里地、里山と里海の物質が循環していた。

第二に、近代漁船が普及する前までは崎浜地区でも木造船や漁具、祭りごとに木材や竹材などが使用され、里山と里海との連環が強く意識された。さらに崎浜の地域民俗である「ご祝い唄」に欠かせない櫓は木製でなければ、独特の音は出せないなど、現代でも、山の恵みと海はつながっている。

第三に、海では「山立」、「山掛け」と呼ぶ伝統的な知恵によって定置網の設置位置を把握することや、「氷上つぶし」、「五葉つぶし」と呼ぶ「山」の形態によって舟の現在地を把握する「知恵」によって、崎浜地区周辺の山が漁業との深い関わりを持ってきた。

現在では、里地、里山、里海の連環の多くは生活構造や産業構造の変化によって失われたものが多いが、そのなかでも山菜採りなどによって山と里の関係は現在も継承されている。また、「北上山地は昔の海底にたまった砂や泥からできた砂岩や頁岩や、珪藻などが集まってできたチャートなどの地質で構成される。これらは堆積岩と呼ばれるがそのほかにも地下深くのマグマが固まってできた花崗岩も分布している。花崗岩は磁鉄鉱や黒雲母、角閃石が、いっぽう堆積岩にも赤鉄鉱やシデライトなどの鉄を含む鉱物が含まれている。こうした鉱物が風化し、森の土壌の中で微生物の働きによってフルボ酸鉄へと生まれ変わった鉄が、川や地下を流れる水を通して海の魚介類に取り込まれたのであろう」と、森と海をつなぐ物質循環の重要性を指摘している専門家もいる。このように、海と山、里と海、里と山はそれぞれが空間的につながって、豊かな文化をつくりだしていたことを再認識することによって、豊かな森づくりが豊かな海の資源をつくり出すことなど、里地、里山、里海の新しい利用の展開が期待される。

*7 「森と海の生き物をつなげる安定同位体」中野孝教：総合地球環境学研究所教授、齋藤有：同技術補佐員
（「大槌の自然、水、人」：秋道智彌編）



(2) 気候や風土に適合した生活の知恵の継承

崎浜地区のみならず気仙地方沿岸部では、気候や風土のみならず、津波などの自然災害から復旧・復興に向けた暮らしをとりもどすための様々な生活の知恵や集落コミュニティの力が継承されている。

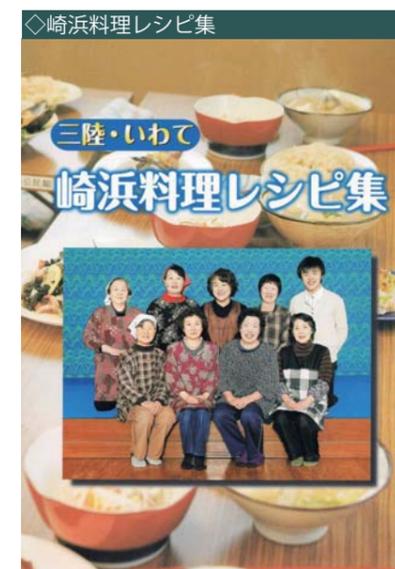
第一にこの地方は、冬の積雪が少なく、内陸部と比較すると平均気温は約3度程度高いが、冬の季節風は強い。また、崎浜地区は明治16年と明治28年の2度に渡って大火を経験していることから、里の家々は、杉や常緑樹のツバキを植栽して防風や防火に配慮している。

第二に、リアス式海岸特有の土地利用が展開する崎浜地区では、山で木炭生産、植林、育林を営み、里の畑で野菜づくり、海では魚貝類を採取・養殖するなど、生業として山、里、海を利用してきたため、子どもたちは山、里、海の自然に関わる生活の知恵を知らずしらずのうちに身につけている。

花巻市浮田地区と崎浜地区との交流から生まれた崎浜小学校における行事では「運動会での剣舞」や「海岸掃除」、「七福神六年生」による学習発表会、「親子でつり大会」などが行われる等、生活文化が次世代へ継承されている。また、崎浜では、サンマ、イカ、サバなどの海の恵みを活かした郷土食があり、レシピ集としてまとめられている。このように、崎浜では生活と仕事が密接に関わって、様々な知恵が大人から子どもへと伝えられている。

*8 「里と海の通り路」第2号

◇民家の植栽：平面図 non scale



特定非営利活動法人いわて地域づくり支援センター提供

(3) 人と人のつながりによる「文化」の継承・発展

崎浜地区では、人と人のつながりによって「里山文化」が継承され、発展している。

第一に、越喜来湾に面した崎浜地区は、「ワカメの養殖」などの浜の仕事、集落組織である「崎浜公益会」が管理する「大六山」の山仕事、草刈りなどの環境整備などを地域協働で取り組む仕組みやアワビの「口開け」など資源を持続的に維持するルールが現在も生きている。こうした仕組みやルールが集落の人と人をつなげる結果となり、東日本大震災後の復興に向けていち早く「崎浜地区復興会議」を立ち上げ、各種の取り組みを進めていくことにつながっている。

第二に、バス等による陸上交通が発達していなかった戦後間もなく昭和22年の頃までは、対岸に位置する甫嶺地区と船による往来が盛んで、両地区は婚姻圏でもあった。現在も崎浜には甫嶺の龍昌寺の檀家があり、人と人のつながりは今も続いている。

第三に、気仙地方は全国にその名が知られている「気仙大工」と呼ばれる匠の技による建造物が数多く残されている。崎浜地区の正源寺は、四度の火災と五度の移転を受け、明治23年に現在の場所で竣工した寺院であるが、現存の建物は立根村の鈴木団蔵が棟梁として采配を振り、小友町の戸羽長五郎が向拝や柱の沓巻に彫刻を施した建造物である。「気仙大工」が尊称の意味で使われる場合が多いが、それは施主の家族と棟梁、彫刻大工が互いに協力しながらつながって、建造物をつくりあげたことによるとされている。
*9：「気仙大工の秀作―寺社建築と民家」：気仙大工左官伝承館 気仙大工展示会実行委員会（平成24年）



最後に、震災前の平成20年から崎浜地区では農村である花巻市浮田地区との交流活動が進められていたが、震災後は交流の目的に復興支援が加わり、支援物資輸送や供養花の植栽活動を行う「ふるさと農園」や農産物を崎浜で販売する「ふるさと市」の活動が定着するなど交流が深化している。

このように、新たな人と人のつながりによる山、里、海の「文化」の再生が進められていることは特筆すべき点である。



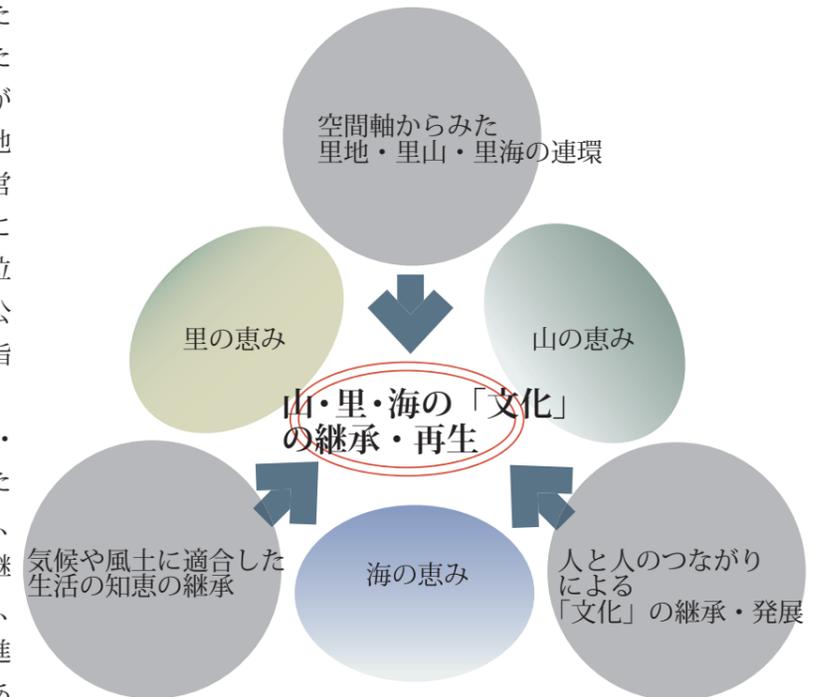
出典 気仙大工の秀作 寺社建築と民家

3. 崎浜地区における「里山文化」の継承に向けて

大船渡市三陸町崎浜地区を事例として、文献調査、現地調査、聞き取り調査などを通じて「里山文化」の特徴を把握した。その結果、東日本大震災によって、多くの大切な資産を失ったことは深刻であったが山の姿、里のくらし、海の恵みなどは変わらず継承、復旧に向けて動きだしていることが把握できた。

「風土は地域の特徴的な自然と歴史・文化の融合であり、そこに私たちの日常生活は存在する。そうした関係によって生じた“郷土”こそが未来世代に継ぐべきものである。地域特性だけでなく地域住民による営為・意識をも地域資源と捉え、特に「郷土財」という公共財のひとつと位置付けている。」と里地里山里海の公共性、地域性の重要性についての指摘が見られる。

崎浜をはじめ、気仙地方の山・里・海と深くつながって継承されてきた歴史・文化は貴重な郷土財といえ、この財産でもある「里山文化」の継承に向けて、空間と空間、人と人、過去と現在をつなげる取り組みを進め、発展させていくことが大切である。



*10 「郷土力を培う淡水魚の保全―大槌町のイトヨから」：森誠一：岐阜大学経済学部教授（「大槌の自然、水、人」：秋道智彌編）

V 被災地における復興への対応 — 崎浜地区復興会議の活動 —

1. はじめに

東日本大震災からもうすぐ3年が経とうとしている。特定非営利活動法人いわて地域づくりセンターの聞き取り調査結果で示されたように、東日本大震災の復興対応においては、崎浜復興会議が大きな役割を果たした。一つの記録として、ここでは崎浜復興会議の取組を整理して紹介しておきたい。

2. 崎浜復興会議の発足

震災直後の応急対応が一段落した2011年6月5日、大船渡市の主導で崎浜地区を含む越喜来地区の震災復興委員会が設立された。これに対応して2011年6月29日には、崎浜地区の自治組織である(社)崎浜公益会によって崎浜地区復興会議が設置された。委員数は22名、うち公益会役員が14名、被災者代表が5名、そして外部有識者が3名である(発足当初は16名)。事務局は公益会事務局が兼務し、外部有識者として筆者(岩手大学)と特定非営利活動法人いわて地域づくり支援センター事務局長、および前大船渡市長が参画している。崎浜地区復興会議の最初の取組は被災者の意向調査であった。その結果、集団移転を希望する声が多くを占めることがわかり、越喜来地区震災復興委員会を通じて、地区としての要望を大船渡市に提出した。7月29日の第2回復興会議からは岩手大学とNPOが会議に加わった。前述のように、当該NPOが震災前より浮田・崎浜交流で関わりがあり、また震災直後には大学と共にボランティア活動を行ったことがきっかけである。大学・NPOの助言により、この段階で委員に被災者、女性が増員されることになった。

3. 集団移転地の検討

同年10月31日には大船渡市の復興計画が正式に定まり、崎浜地区での集団移転実施方針が示された。同日に開催した第3回復興会議では、ワークショップ形式で現在の崎浜地区の課題整理を行い、住宅再建、コミュニティの維持、被災者ケアの3つが重要課題として浮かび上がった。この結果を受け、12月2日の第4回復興会議では、特にコミュニティの維持と被災者ケアについて検討を行い、被災者のみで構成される被災者連絡協議会の設立が決定された。

第4回復興会議の翌日の12月3日、復興会議メンバーで移転候補地の現地調査を行った。この調査結果により、移転候補地は15ヶ所に絞られた。年が変わって2012年1月12日の第5回復興会議では、各移転候補地を安全面、生活面などの視点から評価した。この評価結果は直ちに市役所に提出され、以後、市の内部で候補地の検討が行われることになった。

4. 実践チームの活動

2月22日の第6回復興会議では、住宅再建のほかに崎浜地区として当面優先的に取り組むべき課題を検討し、課題の実践のためのチームを立ち上げることが決まった。漁師の集う「番屋」の建設を行う番屋チーム(男性中心)、震災の記録誌を製作する記録誌チーム(女性中心)、地区のHP製作・管理を行うホームページチーム(若者中心)の3つである。このうち番屋チームは、設計と助成金の確保で、神奈川大学とNPO法人有形デザイン機構の協力を得た。ほぼ毎週末、時には学生の協力も得ながら自主施工を行った。記録誌チームは、13回の会合を経て、2012年10月26日と2013年3月25日の2回に分けて記念誌を発行した。記録誌は1000部刷られ、地区外に住む出身者にも郵送された。ホームページチームは2012年7月にHPを立ち上げたが、その後の更新がやや滞り気味である。

5. 集団移転地の決定と整備計画の検討

復興会議については、2012年3月に、集団移転地と災害公営住宅のイメージを把握するため、新潟中越地震の被災地を視察した。中越防災安全推進機構の協力で地元住民との懇談の機会を持つことができ、非常に有益な視察となった。視察結果は4月24日の第7回復興会議で報告された。

一方、集団移転地の場所に関しては、大船渡市集団移転課と復興会議事務局の間で、具体的な詰めが行われた。その結果、地権者の同意と埋蔵文化財の関係で、最終的な移転候補地は復興会議での評価が低かった場所に決まった。この結果は6月7日の第8回復興会議で市側から提示されたが、その経過説明がなく、唐突に結果だけが示されたため、復興会議の特に被災者代表に大きな違和感を抱かせた。こうした多少の混乱はあったものの、復興会議でこの案が承認され、その後被災者連絡協議会にも提示されて、最終的に集団移転地が確定した。

続く7月22日の第9回復興会議では、実践チームの活動報告が行われる一方、集団移転地以外の整備事業についての情報共有がなされた。崎浜地区では震災前に水産庁の漁業集落環境整備事業の実施が決まっており、集落内の道路や下水道整備の予定があった。震災後、同事業は当然計画変更をせざるをえないはずで、とくに集団移転地の下水処理の扱いが焦点だった。他方、7月下旬から8月上旬にかけて、大学とNPOで被災者の住宅再建に関する個別面談を行い、住宅再建のニーズを詳しく把握した。

集団移転地の決定以後、市からの情報が途絶えたこともあり、集団移転地の整備計画(主に道路と区画の配置)や下水道問題など懸案事項を整理し、要望書(質問書)としてまとめて10月26日に市側に提出した。それに対する回答は11月2日の第10回復興会議で報告されたが、市側の集団移転地の整備計画案が地区側の要望をまったく反映していないものであったため、12月3日に第11回復興会議を開催して、あらためて要望事項をまとめ、12月13日に市に再提出した。また、これに先立つ11月13日には、大学・NPOが主導して開店休業状態だった被災者連絡会を開催し、ワークショップ形式で集団移転地の整備計画を検討した。この会合は被災者に非常に好評で、以後ほぼすべての被災世帯が連絡会に参加するようになった。この場で集約された意見は、前述の第11回復興会議で吟味され、市への要望事項に加えられた。

6. モデル住宅の検討と津波流出地の土地利用計画

年が改まった2013年1月28日、地区側からの要望への回答という形で、集団移転地の整備計画を中心とした市の説明会が行われ、今度は地区側の意見が反映された案が示された。これを受けて、被災者連絡協議会では、4月14日と5月19日に、神奈川大学の建築学研究室の支援を受けながら復興住宅の間取りを検討するワークショップを行った。また随時復興住宅の展示会の見学にも出かけている。ちなみに集団移転地の整備計画はその後も市側の事情で二転三転し、地区側を戸惑わせた。

復興会議については、第12回(4月14日)で集団移転地の整備計画を確認した後、第13回(6月6日)から、遅ればせながらも津波流出地の道路配置と土地利用計画の検討に入った。6月21日には現地調査を行い、第14回(7月8日)と第15回(10月2日)で図面を基に具体的な計画を検討した。この間、市側ではこれらの計画を実現するためのハード事業(漁業集落防災強化事業と漁業集落環境整備事業)の検討を行ってきている。

7. おわりに

崎浜地区では、大学とNPOの支援を受けながらも、大船渡市と対等に渡り合いながら、実に主体的に震災対応を行ってきたことがわかる。このような対応が可能であったのは、崎浜公益会を中心とする長い自治活動の基礎があったためであり、三陸の漁村集落の底力を見たように思う。

東日本大震災被災地では、つまるところ、人と自然の関わり合いの歴史をどう残し、どう伝えるか、そしてどう生かしていくか、ということが重要なポイントとなる。里地、里山、里海の環境から生み出された「里山文化」は、まさに、地域コミュニティにおける人と自然の関わり合いの歴史を残しており、これを伝え、生かしていくことは気仙地方のこれからの課題となる。

東日本大震災の復興は緒についたばかりである。今後も、津波被災地への継続的な関心と支援が望まれる。
(岩手大学農学部 教授 広田純一)



上段 里地の風景
中段 里山の風景
下段 里海の風景

■指導・助言

岩手大学 農学部 教授
岩手県立大学 総合政策学部 准教授

広田 純一
島田 直明

■協力

大船渡市教育委員会
株式会社鹿児島屋
有限会社阿部造園
大船渡市越喜来漁業協同組合
崎浜大漁唄いあげ保存会

社団法人崎浜公益会

酔仙酒造株式会社

花っこ畑

特定非営利活動法人 いわて地域づくり支援センター
希望の花いわて 3.11

金野 良一
及川 喜久平
阿部 信男
中嶋 久吉
上村 勤
木下 勝人
大上 豊明
遠藤 喜隆
中嶋 幸平
佐藤 昭博
村上 雄樹
吉田 正子
若菜 千穂
吉川 三枝子

■資料提供

大船渡市博物館
大船渡市教育委員会

■制作

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2 番 136 号
TEL.06-6915-4500 FAX.06-6915-4524
<http://www.expo-cosmos.or.jp>

本協会は、1990年に開催された国際花と緑の博覧会の基本理念「自然と人間との共生」を永く継承、発展させるために設立されました。潤いのある豊かな社会の創造に寄与することを目的として、「顕彰事業」「助成・協働事業」「普及啓発及び国際交流事業」「調査研究及び資料収集事業」の4つの事業を柱に活動を行っています。

■発行

平成 26 年 3 月

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90
FOUNDATION